

音楽の世界

目次

論壇	喜 願	吉田 泰輔	2
特集	カルメンをめぐる		
	カルメンの衝撃	湯浅 玲子	4
	魔女、妖女伝説と芸術	中島 洋一	8
長期連載			
	音・雑記一ひなの里通信一 (40)	狭間 壮	14
	名曲喫茶の片隅から (21)	宮本 英世	16
	音盤奇譚 (26)	板倉 重雄	18
コンサートレポート	ピアノ部会コンサート きらめく夏に		20
短期連載			
	現代音楽見聞記(6)	西 耕一	23
	福島日記(2)	小西 徹郎	24
	明日の歌を 第4回 舞台から吹く風 (1)	清道洋一・橘川 琢	26
	日本音楽舞踊会議: 出版楽譜のご案内	高橋 雅光	30
◆	コンサート・プログラム	◆	
	CMDJ2011 年オペラコンサート		
	～愛の悲劇～		34
音楽時評	ジュリエッタ・シミオナートをめぐって	火星人	43
	CMDJ 会と会員の情報		44



論壇

喜 願

音楽学 吉田 泰輔

私事で恐縮だが、筆者は18世紀の劇詩人ピエートロ・メタスタージョ (Pietro Metastasio, 1698-1782) に関心があり、半ば趣味で彼の書簡集などを読んでいる。「メタスタージョ」などと書いても、「識る人知らず」であり、またここで彼の経歴を紹介する積りもない。この人物が、1755年の12月5日、マドリッド在住の友人に手紙を書いている。「・・・貴兄のお手紙が私の心にどれほどの思いを惹き起こしたことでしょう！愛、優しさ、困惑、感謝、怖れ、賛美、その他いろいろですが、これ以上表現できません。不運なりスボンのあらゆる混乱状態を身内に感じています。何という恐怖！何という災難！なんたる悲惨！気の毒な人たち！私の悲しみを誘う動機はいくらでもあります・・・」。友人というのは、スペイン宮廷に仕えるファリネッリであり、この当時、詩人は依頼されて『ニッテーティ』という作品を名カストラート率いる宮廷劇場のために執筆していたのだが、大災害による上演の延期を告げるファリネッリからの手紙に、引用したような返信を認めたというわけである。ファリネッリの当該の書簡は未発見で、内容の具体は詳らかではないが、ファリネッリと周囲の人たちのこの災害への活動と被害の状況が記されていたのであろう。

この歴史上有名なりスボンの大震災は、現代の基準ではマグニチュード8.5とか9の規模であったらしい。詩人の手紙より一月前の11月1日に発生し、死者三万、津波は市内を流れるテージョ河を遡及しただけでなく、アフリカ側のモロッコには20メートルの高さで押し寄せたという。フィンランドでも揺れを感じたというから、詩人が住んでいたヴィーンでも大地の動きに人々が驚かされたことであろう。

この地震が大災害として歴史上に銘記されるのは、単に西ヨーロッパ最大となった人的・物的な被害にのみよるのではない。むしろ、良く言われるように、時代を支配していた思想、すなわち知識の増大や理性の広がりと共に人類に至福がもたらされるといふ楽観主義に強い衝撃を与えたことによる。これから後の半世紀間に、アメリカの独立、フランス革命等々世界を大きく変貌させる出来事が相継いだことは、周知の通りである。残念ながら、自然災害とその後の社会の変化との因果関係

を論ずるほどの蘊蓄を持ち合わせていないので、軽々な発言は控えるが、今回のような体験をすると、誰しもが自然の一部としての人間の傲慢・不遜に思いを致すと共に、将来への危惧と懸念を懐いてしまうのではなかろうか。筆者について言えば、関東大震災とその後の二十数年の間に、沈滞する経済と政治の貧困それに人々の無自覚が、結果として何をもたらしたかを思い起こしてしまうのである。

衰退し腐敗していく制度や組織、生活の在り様を根本的に転換するのは極めつけの難事である。歴史を紐解けば、この種の改革の試みが殆ど枕を並べて討ち死にしているのが分かる。以前のこの国の総理大臣が推進した「構造改革」の迷走も、この意味では責められるものではない。というのは、改革は、私たち既存の体制の上に生活している者に大きな痛みを与えることに繋がるからである。改革を妨げるのは政党や官僚組織や経済団体ばかりではない。個人もまた総論賛成、各論反対で、たやすく保守に変身する。筆者が思うには、大衆という衣を被る後者の方が前者よりずっと手強いのである。だから、人々が己の痛みを覚悟し、国家や権力を当てにせず、自ら立ち上がり工夫し思案し活動せざるを得ない状況に陥らなければ、体制の転換は起こりようがない。遺憾なことだが、人々をそうした状況へと押しやる最強の動因は、戦争や災害のもたらす喪失や悲惨なのではなかろうか。そうした時代の潮流が大きくなうねりを描いているとき、その激しい流れを乗り越えるには、カリスマ的な政治家を待望することではなく、私たち自身が生活することの座標の組み替えを受け入れる心の準備をすることだと考える。表現に語弊があるのを承知の上で言えば、現在はまたとない機会を迎えており、この機会を逸してはならないのである。私たちが懐くべきは変革への受身の悲願（何と日本的な表現！）ではなく、積極的な喜願なのである。

蛇足だが、震災後のポルトガルには豪腕宰相が登場し、保守勢力の反対を押し切って都市の再建や産業振興に腕を振るったが、国王の交代により失脚した。その後のポルトガルが、かつての大航海時代の輝きを取り戻せず今日に至っているのは、ご存知のとおりである。

（よしだ・たいすけ 国立音楽大学名誉教授）



《カルメン》の衝撃

オペラ・コミック座で初演された「悲劇」

研究・評論 湯浅玲子

オペラの名作として人気の高い《カルメン》が、初演は不評であったことはよく知られている。初演の失敗を乗り越えて、その後、傑作として後世に残った作品は少なくないが、《カルメン》のように、初演前から劇場側や演奏者たちの抵抗に遭い、酷評を覚悟で舞台に臨んだという例はそう多くないだろう。上演中止を免れて初演に至った経緯や、作曲者ビゼーと劇場側の応酬を詳しくみていくと、恋愛悲劇《カルメン》が、当時の社会にとってどのような意味を持っていたものであったかを垣間見ることができる。

オペラ・コミック座に集う人々

1714年にパリに創設されたオペラ・コミック座は、「コミック」というその名のとおりに、オペラ・コミックを上演するための劇場であった。悲劇的イタリア・オペラの伝統を受け継いでいるオペラ・セリアは、オペラ座で上演されていたので、オペラ・コミック座は、その他の喜劇性を持つもの、語りの入った作品を受け入れる劇場となっていた。

気軽に鑑賞できるオペラ・コミック座の聴衆には、親子連れも多く見られ、栈敷席では、毎回5、6組の見合いの席が予約で設けられていたという。そのような人々が求めるオペラは、皆が幸せになれるハッピーエンドの演目であった。オペラ・コミック座における人気作曲家、オッフェンバックの作品の数々を思い浮かべれば、どのような作品が好まれていたかが想像できるであろう。

《カルメン》の初演に至るまで

1873年、オペラ・コミック座からビゼーに作品の注文が入った。当時のコミック座で上演されるものといえば、家庭的な平和な喜劇が定番となっていたので、当然、支配人はそのような喜劇を期待していた。財政難であったことも考慮すれば、確実な収入を期待できる演目であることは必須の条件であった。しかし、作品の完成を前に入ってきた情報は、メリメの小説「カルメン」を原作としたオペラである、ということであった。原作がどのように脚色されているか、ということなどは全くわからないまま、支配人であるルヴァンは「オペラ・コミック座は家族の劇場だ！見

合いの劇場だ！・・・お願いだからカルメンを死なせないでくれ！オペラ座で死人だなんて！」と激しく抵抗したという。

上演を反対したのは、支配人だけではない。カルメン役を打診された歌手マリー・ローズも、「この役は自分に向きようがない、自分がこの役に向いていない」とビゼーに断りの手紙を書いた。原作にあるカルメンのみだらな側面を演じなければいけない、ということに抵抗を感じた様子が、その手紙からはうかがえる。

初演に向けたリハーサルは5ヶ月近くかかったが、支配人はもちろんのこと、演奏者からも激しい抵抗をうけた。たとえば第1幕、カルメンが逮捕されるところの女声合唱では、それまで整列して歌うのが常であった合唱が、動作をつけながら歌うことを要求されたことに、合唱者たちが当惑したという。ストライキ目前までいき、支配人（前出のルヴァンの後任者）は「悪魔のような合唱だ」と苛立ちを隠せなかった。

そして1875年3月3日。《カルメン》は「背德的」との批判のなかで初演を迎えた。支配人は、スペインの大使と外交官たちをあえて招待しなかった。スペインを舞台とした「コミック座にふさわしくない衝撃的なオペラ」に、後ろめたい気持ちがあったからだろう。

酷評された初演

波乱の続いたリハーサルも、初演を迎える頃には、楽団員も出演者も作品に慣れ、音楽を好むようになっていたという。しかし、初めて接する観客には刺激が大きすぎたようだ。第2幕への間奏曲にこそアンコールがかかり、エスカミリョの「闘牛士の歌」は拍手喝采を受けたが、その他の部分については、沈黙があったり困惑することが多かった。

初演についての新聞雑誌の批評は、そのほとんどが酷評であった。舞台上で演じるには物語が「卑猥」である、オーケストラの音量が大きすぎて声が聞こえない、カルメン役のガリーマリエの演技は、刑事裁判所から叱責を受けてもおかしくないものだ、などと書きたて、ビゼーを落胆させた。これほどの酷評を受けたということは、伝統を誇るオペラ・コミック座にとって、《カルメン》が衝撃的作品であったことを物語っている。

《カルメン》は初演こそ失敗したものの、その後は30回以上上演された成功作品である、と言われるが、この30回という上演回数は、この時代にしてみれば決して多い数ではない。当時、人気の高かったオッフェンバックの作品は、400回などという上演回数を誇っていたから、まったく足元にも及ばない数である。しかもその《カルメン》の上演も、満席ということはほとんどなく、4、5回の公演の後に打

ち切れそうになると、切符を安く売って観客数を確保していたという。作品のスクランダル性でかろうじて客足を繋いでいたようだ。

《カルメン》が後世に残るような人気と支持を得るのは、ビゼーの死後、ギローがグランド・オペラ用に書き換えて上演されるようになってからである。

オペラ《カルメン》で書き換えられた悲劇

酷評を覚悟で初演に臨んだ《カルメン》であるが、なぜ、「上演中止」という選択をしなかったのだろうか。作品の完成前から主演候補に断られ、リハーサル中も常に周囲の激しい抵抗を受けているのであれば、上演を中止し、無難なオッフェンバックの作品でも再演するという選択肢もあったはずだ。

そのあたりの謎は、ビゼーや台本作家、演出家たちが、原作のイメージを払拭すべく奮闘した様子を辿ると、すこし解けてくる。演出や舞台設定を変えることで、その

都度、周囲との妥協点を見出していったのだ。その結果、メリメの小説《カルメン》とオペラ《カルメン》では、描かれている恋愛悲劇が変わっているのである。

台本作家たちは、カルメンの刺激性を心配する支配人たちに、「原作よりも穏やかで和やかなカルメン」にすること、「オペラ・コミック的な純粹無垢な乙女たち」「コミカルなジプシーたち」が登場することを約束して安心させた。そして、たとえば《カルメン》のいちばんの悲劇的場面である、最後の「カルメンの死」を、華やかなファンファーレが鳴る祭りの場であっさり描いた。「死」をぼかしてしまったのである。そして暴力的で陰気な印象を与える原作小説を、女性の自由意志が前面に出たドラマへと仕立て直した。オペラ《カルメン》は、ヒロインの死で幕を閉じることから、悲劇には違いないが、奔放に思うがままに生きた女性のひとつの結末としての、いわば淡白な悲劇に書き換えられた。原作の泥臭い悲劇とは全く質の違うドラマに生まれ変わったのである。

ビゼーの野望

《カルメン》が初演を迎えるまでの混乱ぶりを辿ると、なぜそこまでしてビゼーは《カルメン》にこだわったのか疑問に思えてくる。《カルメン》を原作に選んだ段階で、周囲から反対を受けることは容易に想像できたはずだ。



ジョルジ・ビゼー (1838~1875)

ひとつの解としては、ビゼーが小説《カルメン》を読んで、そのオペラ化をかねてから切望していたという可能性がある。しかし、それならばあえてコミック座ではなく、オペラ座での上演用として作曲すれば話が簡単だったはずである。支配人のご機嫌を伺いながら場面設定の変更などしなくてもすんだだろう。

あくまでも推測の域を出ないが、この常識を覆す試みに、オペラ座進出を睨んだビゼーの野望を重ねると、納得がいく。この推測も、ビゼーが書き残した書簡などから、ある程度の確証が得られる。

ビゼーは、オペラの舞台で大成功を収めるにはどうしたらいいか、ということをして20歳の頃から常に考えていた。この時期に母親に送った手紙を読むと、ビゼーは、聴衆好みの作品を量産する売れっ子の作曲家を軽蔑しながらも、自分の音楽を追求しつつ作曲家として身を立てていくには、そのような道しかないのではないかと常に悩んでいたようだ。《カルメン》初演から遡ること16年前の1859年には、「金と通俗的な成功はあきらめなくてはならない。私は、自分の趣味を曲げずに、覚えやすくリズムミックなモチーフを作り出すことができる。モチーフこそが作曲家としての成功で重要なことで、自分のオペラにも1ダースのモチーフを使っている」と自分の考えを書き残している。

聴衆に覚えやすいモチーフを用いる、という意味は、有名な《アルルの女》(1892年作曲)やその後の《カルメン》でも貫かれている。器楽曲用に編曲された「カルメン幻想曲」が人気のレパートリーとして定着したのも、モチーフに魅力があったからであろう。

オペラ・コミック座から作品の依頼がきたとき、ビゼーは、オペラ座での進出と成功を睨んで、あえて悲劇を選択したと思われる。コミック座での上演を足がかりとし、悲劇を題材とすることで、本格的なオペラを作曲する能力があることをアピールしたかったのではないだろうか。メリメが小説で描いた「愛」や「悲劇」が、台本作家たちにどう書き換えられようと、目的は、上演を実現させることだったのだ。

ビゼーは、「オペラで成功を収める」という野望を、存命中に叶えることはできなかった。彼は、直接の後継者を残さないまま、《カルメン》の33回目の上演の夜に37歳の若さで亡くなった。しかし、コミック座に衝撃を与えた《カルメン》は、その後、コミック座の存在意義を大きく変え、オペラ史そのものを転換させていくことになる。

(ゆあさ・れいこ 本会研究会員)

魔女、妖女伝説と芸術

作曲 中島 洋一

本年9月のCMDJ オペラコンサート公演において、ビゼーの『カルメン』を取り上げるようになった。実は2005年12月に開催された第1回目のオペラコンサートにおいても、最後の演目として、今回よりコンパクトの形で『カルメン』が演奏されている。また今回は、前半のアリアコンサートにおいて、マスネのオペラ『エロディアド』より、サロメのアリアが歌われる。「カルメン」、「サロメ」は、文学、音楽、美術など芸術愛好者にとって、非常に強い印象を残す伝説の妖女の名前といえよう。そこで、女性の描き方を通して、芸術作品に触れてみることにした。

タイトルに「魔女」という言葉を加えたのは、「聖女」という言葉と対比させるためであり、深い意味はない。

1) まず聖女伝説から

多くの男性芸術家にとって、もっとも描きたい対象は女神であろう。

ルネサンスの画家ラファエロは多くの美しい聖母像を残しているが、それは、単に依頼主のニーズに応えただけの結果とは思えない。

少年後期には文学から遠ざかっていた私だが、青年期に入り再び文学に熱中するキッカケになった作品が18才の時読んだゲーテの『ファウスト』であった。悪魔メフィストフェレスと契約し、人生を生き直したファウストは、グレートヒェン（グノーの歌劇『ファウスト』ではマルガリーテ）との恋愛、皇帝への士官、ギリシャ神話の世界への旅、など多くの経験を重ね、やがて老いて死ぬ。ファウストはメフ

音楽現代

2011年8月号 定価 840円

このたびの東日本大震災の犠牲になられた方々に深く哀悼の意を表しますとともに、被災された皆様に心からのお見舞いを申し上げます。一日も早い復興をお祈り申し上げます。

♪特集

作曲家ベイシックシリーズ 8

「シューベルトの作品をめぐって」

♪特別企画

今秋来日するアーティストたち (1)

～オーケストラ、ピアニスト、オペラ

♪カラー口絵

- ・メトロポリタン・オペラ日本公演「ドン・カルロ」、
「ラ・ボエーム」、「ランメルモールのルチア」
- ・あらかわパイロイト特別公演「魔笛」
- ・トナカイオペラサロン「リゴレット」

♪インタビュー

ルノー・カプソン 高橋薫子 山田和樹 他

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11

TOMYビル 3F

芸術現代社 Tel.3861-2159

イストフェレスとの賭けに負けるが、自分の子供を孕み嬰兒殺しの罪で処刑されたグレートヒェンの魂に導かれ昇天する。

「女性による魂の救済」のテーマは、ワーグナーの歌劇『さまよえるオランダ人』、『タンホイザー』にもみられる。『さまよえるオランダ人』のゼンタは、自分の恋するオランダ人が幽霊船の船長だと知りながら、海に身を投ずる。幽霊船は呪いを解かれ沈み、オランダ人の魂は浄化され、ゼンタとともに昇天する。『タンホイザー』についてはよく知られているので、説明を割愛するが、私の学生時代にNHKラジオで「ワーグナー」の特集番組が放送され、その中でマンフレート・グルリットか、クラウス・スプリングハイムのどちらかだったと思うが「私は13才の時、はじめてタンホイザーの舞台を観たが、その夜はあまりの感動と興奮で眠れなかった」と語っていたのを思い出す。

日本の聖女伝説というと、加藤道夫の戯曲『なよたけ』が心に浮かぶので、少し触れてみよう。石ノ上ノ文麻呂は友人の恋の手助けをするつもりで竹取の翁の娘、「なよたけ」に近づくが、やがて彼の心は彼女のとりこになってしまい、現実と幻想の世界を彷徨う。現実の世界においては、彼女は文麻呂から去って他の男（大納言）のところへ走り、幻想の世界では、彼の胸の中で死ぬ。文麻呂はこの経験を通して、名作『竹取物語』（かぐや姫の物語）を書くことを決意する。

『なよたけ』からは、作者の青春の魂の軌跡を読むことが出来る。戦場へ赴く前に、遺書として書かれたものであろう。死を意識した者のみが到達できる透明感を感じとることが出来る。彼の劇団仲間たちは、戦争が終わったらこの作品を上演しようと約束を交わし、手書きでコピーを三通作りそれぞれが保管し、作品が戦火で失われるのを防ごうとしたという逸話が残る珠玉の名作である。なお、この戯曲の全文が、ホームページで公開されている。

http://www.aozora.gr.jp/cards/001240/files/46361_25175.html

生身の女性にも言及しよう。聖女、賢女 というと、私がすぐ思い起こすのが、ドストエフスキーの二度目の夫人、アンナ・グリゴリーエブナ・ドストエフスカヤと、画家シャガールの最初の夫人だったベガである。夫の生活面を支えたしっかり者のアンナ、シャガールのミューズ（美神）だったベガ、それぞれタイプは異なるが、二人が存在しなければ、あのような作品が生み出されなかったのではないかと思わせるほど、二人の芸術家にとって必要不可欠な存在だった。トルストイは「多くのロシアの作家やわたしが、貴女のような人を奥さんに持てたらもっとよかったですように」とアンナに賛辞を送っているが、彼女はもともと速記者として生活の自立をめざした新しいタイプの女性であった。もし、ドストエフスキーでなく他の凡庸な男と結婚していたら、悪妻になったり、離婚して自立したりしていた可能性は大いにある。

二人の献身は、自己犠牲ではない。夫の芸術活動を支え、その成果を共有することが、自らが強く求めた生き甲斐であり、生きる意味でもあったので、努力を持続することが出来たのであろう。

2) 伝説の妖女サロメ

「サロメ」というとすぐ、頭に浮かぶのは、ビアズリーのエロチックで退廃的な挿絵が入ったオスカー・ワイルド(1854-1900)の詩劇『サロメ』、リヒャルト・シュトラウスの楽劇『サロメ』の「7枚のベールの踊り」の音楽、聖ヨカナーンの首と対峙するサロメが描かれた、ギュスターヴ・モローの絵画『出現』である。

私は子供の頃、ワイルドの童話が好きだった。例えば、『幸福な王子』では、貧しく不幸な人々が多くいることを知った金箔の像の王子が、自分の身体の一部である金箔や、宝石を次々と与え、ついには目が見えなくなる。王子の手助けをして贈り物を運んだツバメは、南の国へ行く機会を逃し、最後に王子にキスをし、「さよなら」と呟き、死んでしまう。

このシーンなどは涙なくしては読めなかった。そして、大人になってから、はじめてワイルドが『サロメ』や『獄中記』の作者であることを知ったのである。

ユダヤのヘロデ王は、妖しく美しい肉体をもつ王妃ヘロディアの連れ子サロメに下心を懐き、自分の前で踊るように命ずる。サロメは踊りながら7枚のベールを次々と脱いで行く。すっかり興に入ったヘロデが「お前の望む物はなんでも与えよう」と言うと、サロメは洗礼者ヨカナーンの首が欲しい、と申し出る。ヘロデは驚いてためらうが、とうとう首を与えてしまう。しかし、ヨカナーンの首に語りかけ、口づけするサロメに恐怖をおぼえ、彼女を殺させる。

ヘロデ王も、王妃ヘロディアも一族の血族相姦の罪をなじり、新たな救世主の存在を予言するヨカナーンを嫌っている。しかし、ヘロデ王はヨカナーンを恐れている。その恐れには、童話においてキリスト教的自己犠牲の精神を描き、耽美主義という思想のもと、背徳的な世界にも惹かれるワイルド自身の心の投影があるのかもしれない。しかし、サロメにとってヨカナーンは、自分の恋の対象であることがすべてである。自分の方を向いてくれないヨカナーンの心を自分のものにしたいとひ



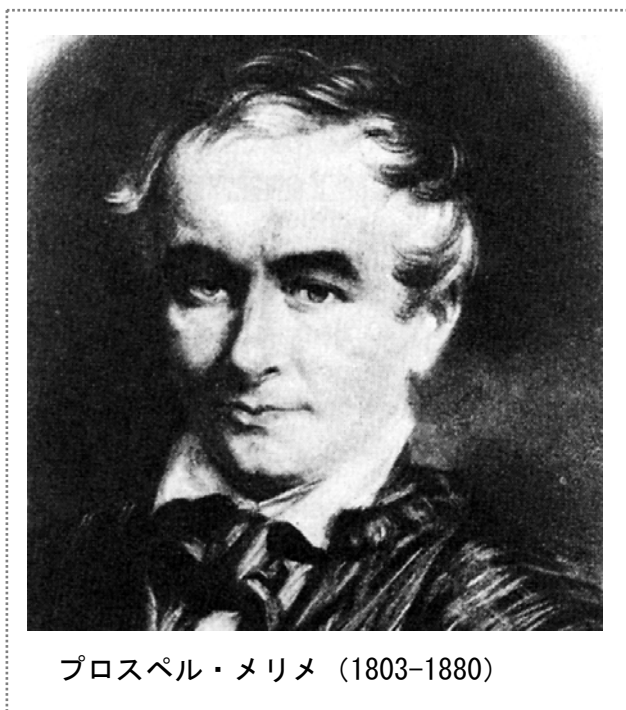
洗礼者ヨカナーンの首に語りかけるサロメ (ビアズリーの挿絵)

たすら願い、それがかなわずにヨカナーンの首を所望するが、骸（むくろ）となった首は、自分を見つめてもくれないし、語りかけてもくれない。サロメは信仰、罪の意識などが届かぬ別世界、恋する相手のすべてを独占したいという欲望に取り憑かれた狂気の恋の世界に生きているのである。

ところで、マスネの『エロディアド』は、フローベルの『3つの物語』のうち古代史の再現をめざした『ヘロディアス』から材料を得ているが、ストーリーは違っており、エロデ王（ヘロデ）は嫉妬心から、ジャン（ヨカナーン）を殺し、サロメは恋するジャンの後を追って自殺するという筋書きになっている。ここではサロメは妖女でも魔女でもなく、恋を貫く女として描かれている。

3) 小説におけるカルメン

「カルメン」は架空の女性の名前のうち、最も人々に知られている名前であろう。それはプロスペル・メリメ（1803-1880）の原作にもよるが、やはりオペラ『カルメン』が女性名としての「カルメン」を世界的に広めたと考えられる。原作の小説については、今でも安い文庫版で容易に手に入れることができるので、読んだ人もいると思う。私はやっと最近になって読んだのだが、そこに描かれているカルメン像が、オペラのそれとはかなり異なっていることを感じた。



プロスペル・メリメ（1803-1880）

オペラのカルメンは、移り気だがその時々の愛に情熱を燃やす自由で誇り高き女である。しかし、小説のカルメンからは、恋に情熱を傾ける女というより、自分の生活スタイルを変えない生活人という印象を強く感じる。

彼女が守りたいものは、必ずしも愛ではなく、自分の自由な生き方であったと思える。最後の闘牛士の男をめぐる対話を引用しよう。（岩波文庫「カルメン」杉捷夫訳）「お前はルーカス（オペラではエスカミリオ）にほれているのか？「そうさ、私はあの男にほれましたよ。お前さんにほれたように、一時はね。たぶんお前さんほどには真剣にはほれなかったろうよ。今では、何も愛しているものなんかありません。そして、私は、おまえさんにほれたことをにくらしく思っているんだよ。」その時点で闘牛士はすでに女にもてる勇敢で格好のいい男ではなく、怪我で再起不能になっていたのだ。それにも関わらず、カルメンはドン・リサラベングウ（オペ

ラではドン・ホセ)の「昔のよりを戻してくれ」という願いを拒み続け、男に刺されて死ぬ。

カルメンはカルタ占いに頼らなくとも、はじめからこの男に殺される結末を予感していたのだ。カルメンは自分に執着し続ける男を可愛いく思いながらも、次のように警告している。「つづきっこはなしさ、犬と狼じゃ長いこといい所帯はつくれませんからね。」犬とは既成の社会の秩序、倫理観のもとで生きることが相応しいドン・リサラベングワでのごとであり、狼とはそんな規範に何の恐れも価値も見いださず自由奔放に生きる彼女自身である。人を騙し、物を盗み、犯罪を犯し続ける生活も、ジプシーの女のカルメンにとっては、日常そのものであり、後ろめたいものではなかったが、彼にとってはカルメンのために耐え忍ぶことを余儀なくされる不本意な生活だったのだ。彼が自分(カルメン)を諦めることが出来ず、自分は彼が求めるような女になれない限り、最後は彼に殺されるという結末しか残されていないことを悟っていたのである。

4) オペラにおけるカルメン

ビゼーは当初は原作に忠実な台本を望んだらしいが、カルメンが盗賊の女であるなど、色々問題もあり、書き上げられた台本は原作とはかなり違ったものになった。カルメンは愛に生きる情熱的で自由奔放な(この点は原作を踏襲している)女として描かれ、闘牛士エスカミリオは格好のいい恋敵に、そして、ミカエラという一人の男を愛し続ける純情でしっかりものの少女も書き加えられた。もっとも異なるのは、殺戮シーンである。小説では薄暗い洞窟で行われるが、オペラでは闘牛場の歓声を背景にカルメンは殺される。私は、このラストシーンは、数あるオペラのラストシーンの中で、最も成功したものの一つという感想を持っている。

カルメンの音楽は、明るさ、暗さ、ドキツさ、優美さが織りをなして連なっている。この音楽からは「タイクツ」の「夕」の一字さえ、感じる事が出来ない。

ワーグナーとの関係が悪くなっていた哲学者のニーチェは、ワーグナーの作品とは全く異なる『カルメン』を、ヨーロッパ芸術の地中海化への原理にほどよくかなった理想的オペラ、と賞賛している。

ビゼーより2才後輩のチャイコフスキーは、ビゼーの死から5年後、次のように記している「昨夜、仕事の疲れを休める為にビゼーの『カルメン』を全曲弾いた。傑作という言葉の意味をいかに発揮した楽曲だ。今後10年の間に世界で一番人気のあるオペラになるだろう」。やがて大作曲家ではあるが、バレエ音楽で世俗的な成功も収めたチャイコフスキーの勘は当たる。

ところでチャイコフスキーは『カルメン』の全曲弾いたことを5年後に記しているが、『カルメン』のヴォーカル・スコアは、ビゼーが没した年の1875年に、すで

泣きっ面に蜂の始末記

驚きました。2011年6月30日午前8時16分。松本で大きな地震。震度5.5強。地底から突きあげる揺れ。わずか数秒ではあったが、充分な恐怖を味わった。

書棚からは本が、食器棚からは食器が落ちた。揺れがおさまってから庭に出た。隣近所からも次々と人が出てくる。屋根瓦が地面に散乱する家屋も目にする。わが家は、と点検する間もなくの第2弾。強い余震だ。

しばらくは屋外に退避していたが、結局は震度3以上を7回、落ちつくまで1週間、計37回の揺れにひやひやしていたのであった。

当座、書棚や本その他雑多なものを整理処分するのに3日ほどを費したけれど、その間いろいろとわが家の被害も分かってきた。今もその途中である。松本市では(7月15日時点で)家屋などへの被害が4161件と発表されている。

松本城の壁の一部の亀裂、その他文化財への被害も発表された。とりわけ音楽文化ホールの被害は大きく、一部天井の損壊の修復に、向こう1年半ほどを要するらしく、音楽関係者は不自由を強いられることになった。



この地震に名称はない。「長野県中部を震源とする地震」と、気象庁は事務処理しているようだ。こんなに驚いたのに名まえの一つぐらいつけてもよさそうに思うのだが、地震国日本としては、特別なものでなく、その他大勢の一つとしてのカウント規模なのだ。

日本列島、本州を東西に2分する糸魚川—静岡構造線という大断層が、松本の直下にある。これにそって平行に走る7kmの牛伏寺断層があるが、今回、この2本の中ほどにあった未知のものだという。地面の中のこと、他にもまだありそうだが、揺れてはじめてその存在を知ることになるのだろう。不安は尽きない。

ところで牛伏寺断層であるが、牛伏寺は「ごふくじ」と読む。松本に来た当初、「うしぶせでら」と言ったら訂正された。しかしその近くを牛伏(うしぶせ)川が流れる。

牛伏寺のそばを通る断層なので、牛伏寺断層と名前を借りたが、断層は日本列島誕生からのもの。調査の結果、800~1000年の周期で動いていると判明したとのことだ。直近は1200年ほど前で、そろそろ出番らしいのだ。東日本大地震で誘発されて、と警告されている。それがいつか、今この時かもしれないのだ。備えは如何に。逃げるに如かずか・・・。

断層からは少々はずれた話になるが、牛伏寺縁起である。松本の東南に鉢伏(はちぶせ)と呼ばれる2000米ほどの山があって、その山麓に牛伏寺はある。牛伏寺はその起

源を奈良時代にさかのぼる古刹である。その頃中国では唐、玄宗皇帝の統治下にあった。楊貴妃の冥福を祈るための経典を600巻、善光寺に納めることになったのだという。

難波の港に陸上げされ、経巻は2頭の牛の背に負われて善光寺を目指した。長い旅路に疲れた牛は途中で倒れてしまう。まさに山麓のこの寺の前だという。

牛はこの地に葬られ、牛堂が建てられた。経巻はそのまま寺に納められた。この寺の名称は普賢院・威得坊であったが、これを機に牛伏寺と改められたとのことである。

話は現実に戻る。松本地震(仮名)の影響、日が経つにつれ少々やっかいなことになっていることが分かってきた。吾が家は耐震基準の甘いところに建てた。ほどなく増築したのだが、手抜きであったのか、本体との接合部分に大きな亀裂が入ったのだ。その他にも、これはその前に判明したのだけれど、風呂の排水処理にも問題があり、地盤や土台の基礎にゆるみが出ていたのだった。他にも、とあげると憂鬱になるのでやめておくが、そんなこんなで、次に同じ規模の地震があったら倒壊の心配をかかえることになった。

さてどうする。只今思案中なのだ。それで身の回りがあわただしく、落ちつかない日々を送っている。

夏恒例にしている平和コンサート「一本の鉛筆があれば」を中止した。この状況では納得のいくものにはならないからだ。

この中止の後始末がまた大変なことである。新聞へのお詫び広告を始めとして、後援の各社、各氏への連絡などなど。チケットの払い戻しも含め残務の多いこと。とりわけ支援してくださっている諸先輩の皆様には申し訳なく、私自身それがなさけなくもあって。

松本市、となりの塩尻市も含めれば、4200件近くになる被害であれば、その修理にも時間がかかるのだろう。そうではあっても、東日本大震災での被害を思えば、泣き言も言ってもらえないのだ。

驚きましたね「なでしこジャパン」。サッカーワールドカップ優勝。世界中に激震が走った。不屈の「なでしこ魂」炸裂！想定外？いや失礼。何だか久しぶりに明るいニュース。

吾が家の“なでしこ”は、「なるようになる。なるようにしかならない！」と、忘れた頃にやってくる次の地震に備えて、黙々と後かたづけに汗を流している。猫のハイジが手を貸して参加。私は、せめて足手まといにならぬように離れて、それらをぼんやり見ている。そして言うのだ。「オーイ、お茶！」・・・、にでも・・・なるかな・・・。

【筆者紹介】 狭間 壮(はざま たけし)：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中NHK「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。





連載 名曲喫茶の片隅から

宮本 英世

〔第 21 回〕「ブンガワン・ソロ」の思い出

かつてはよく聴かれ誰にも知られていた曲が、いつの間にか忘れられ耳にすることも無くなっている。そういう曲が世の中にはたくさんある。流行だから仕方がないと思うけれど、何かの機会に久しぶりに聴くと、当時のことが蘇ってきて「懐かしい！」と思うことがあるけれど、皆さんはどうだろう？



ブンガワン・ソロ(ソロ河)の風景

そんな一曲、「ブンガワン・ソロ」の思い出を聞いて頂こう。CDを探してもほとんど見当たらないこの曲。70代以上の人には、もしかして非常に懐かしい曲といえるかもしれない。なぜなら、インドネシアはジャワ島の民謡であるこの曲を最初に覚えたのは、その人たちだったかもしれないからである。つまり第2次大戦中に東南アジアに進出した日本の軍人たちが現地で覚え、それを国内に伝えたといわれているのと、もう一つ、戦後の日本がかの国に迷惑をかけたとして、賠償協定の一つとしてインドネ

シアの学生たちを多数日本の大学に留学させた。その時の学生たちが母国の国民歌としてこれを伝え、折しも盛りあがっていた「うたごえ運動」(総評が後押しし、労音が進めていた現在のカラオケ・ブームのようなもの)が取りあげたことが大きいらしい。ともかく誰もが耳にし、歌っていた。そして確か教科書にも載っていた名曲なのである。

「ブンガワン・ソロ」とは「ソロ河」という意味。インドネシアは、よく知られるように赤道直下、多くの島からなる、熱帯国家だが、スマトラ島とともにその中核をなすジャワ島に古くから伝わるのがこの歌で、“ブンガワン・ソロ、古き日の夢をのせて、果てしなく流れる。ある時は水が涸れ、ある時は溢れても、山に湧く清き水あつめて、遥かに旅し、海に注ぐ・・・”と、悠久の流れを歌っている。日本でいえば、「さくらさくら」や「荒城の月」に匹敵する国民的な愛唱歌といってよいかもしれない。

疎開とか空襲は知っているものの、戦争世代とはいえない私がこの歌を知ったのは、もちろん戦後の「うたごえ運動」によってだが、もっと後の昭和30年代半ごろ、じつは忘れられない体験をしているのである。それは、さきのインドネシアの賠償留学生たち自身によるこの歌の合唱を、なんと私は一人で聴いたことがあるのである！そう、

もう遙か 50 年にもなる昔の話。いきさつは、こうである。

18 歳の時、家庭の事情で一人暮らしをすることになった私は、朝鮮動乱を背景に生まれた特需関係の自動車修理会社で働きながら夜間の大学へ通っていた。しかし会社は先が見えていて、卒業後は学校紹介のレコード会社へ入ろうと、就職シーズン直前にそこを退社。運よく内定通知を貰ったのが卒業前年の 10 月。卒業までの数ヶ月をアルバイトでつなぐことになった。そんな一つが、銀座にあった「十字屋」という楽器店。行ってみると仕事は通りの向かい側にある「松屋デパート」の楽器売場。ギターやフルート、ハーモニカを売る応援店員である。立ちっ放しは疲れたが、美しい女性はいるし、人間観察は出来る。時には外人相手に英会話も勉強できるとご機嫌でやっている、ある日ハーモニカを欲しいとやってきたのが、インドネシアの賠償留学生、ワフヤディ君。互いにたどたどしい英会話でやりとりしながら、気が合っさり友だちに。私の下宿にも来たが、「僕らのホテルに来ないか」となって出かけたのが、千駄ヶ谷にあった「日本青年館ホテル」。都内でも最古の音楽ホールがあった所である。

秋も深まったある日、菓子折りを持って訪れると、古めかしい廊下の奥にある広い部屋。ドアを開けた瞬間、あっ！と驚いた。何十畳もあろうかという室内の両側に 20 ぐらいのベッドがずらり。その全部に学生たちが起きあがっていたのである。一瞬、恐怖心を覚えたが皆にこやかで優しく、打ちとけてくると買って貰ったハーモニカを吹き、私にも何か吹いて欲しいという。「荒城の月」を吹くと、いかにも興味津々といったようす。その時ふと思いついて「ブンガワン・ソロ」を吹いてみると、案の定あちこちから拍手が起った。終ると、さらに大きな拍手！と思う間もなく、今度は歌が沸きあがった。誰が始めたのか、一人が歌い出すと次々とベッドの仲間がそれに加わり、遂には大合唱となって、部屋の中が「ブンガワン・ソロ」一色となった。かなりの大音響であった。

何回かの交流のあと、デパートのアルバイトは期限がきて終り、ワフヤディ君との付き合いもいつの間にか途絶えた。あれから半世紀になるが、今頃彼はどうしているのか。「ブンガワン・ソロ」を聴くたびに、色黒で人なつこかった顔が今でも懐かしく浮かんでくる。

.....

【宮本英世氏プロフィール】1937 年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア（洋楽部）、リーダーズ・ダイジェスト（音楽出版部）、トリオ（現ケンウッド）系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」（東京・池袋）の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲 100 選」（音楽之友社）、「クイズで愉しむクラシック音楽」（講談社）、「喜怒哀楽のクラシック」（集英社）など多数。



ヨセフ・スーク追悼

去る 7 月 6 日にチェコの名ヴァイオリニスト、ヨセフ・スーク (1929~2011) が亡くなった。ドヴォルザークを曾祖父にもち、同姓同名の作曲家を祖父にもつ彼は、チェコ音楽の生きた歴史だっただけに喪失感が大きい。



わたしは一度だけスークの実演に接したことがある。1979 年、中学 2 年生のときに来日したスーク・トリオの演奏を名古屋の愛知県文化講堂で聴いた。このホールは、床に擦り切れた赤い絨毯が敷き詰めてあるという、視覚上も音響上も劣悪な会場だったが、彼らは真剣そのものの演奏を披露してくれた。ベートーヴェンの《街の歌》《大公》、チャイコフスキーの《偉大な芸術家の思い出》という豪華なプログラムだった

が、残念ながら感動には至らなかった。覚えているのは 3 人の態度が非常に真面目で、演奏は情熱の高揚はあるものの表現の踏み外しは無く、まるで傷の無い安定した演奏を行ったことだけである。

当時は作品や演奏についての理解が浅く、弦楽器の音色の変化を楽しむ視点がなかったのも、今聴けばまるで違った印象をもつことだろう。ただ、スークの演奏にも派手な表現を嫌い、几帳面で、音楽に誠実に接する姿勢があったことは、彼の LP レコードからも窺えるところである。スークはチェコ音楽の伝統を受け継ぎながらも、60~70 年代に主流だった謹厳実直な演奏様式の影響を強く受けたヴァイオリニストだった。

わたしが CD 店に勤め始めた 90 年代は、老境に入ったスークが録音活動を再開した時期に重なった。新しい CD を幾つか耳にして、彼の演奏に変化を感じずには

いられなかった。造形を引き締めすぎることなく、旋律を伸びやかに歌い、音色の明暗に心を配り、わずかなテンポの緩急を使うなど、演奏にゆとりが加わったのである。98年5月録音のバッハのソナタ集のジャケットで、スークとチェンバロのルージイチコヴァが微笑む写真は、まさに彼の芸風の変化を象徴しているようだ。

●J.S.バッハ：チェンバロとヴァイオリンのためのソナタ全集（写真前ページ左）

ヨセフ・スーク（vn）ズザーナ・ルージイチコヴァ（cemb）

[日本コロムビア OS455~6 (LP)]

1965年6月発売。30代だった二人の共演。「どこまでも澄みきった音、きわめて高度なメカニクを蔵しながら、しかもそれを表面に誇示することなく、内面的に深い音楽を奏でる」（大木正興氏）。解説書には二人の真剣な眼差しの肖像写真が印刷されている。

●同上／同上（写真 右）

[チェコ LOTOS LT0060-2132 (CD)]

1998年5月録音。70歳に近付いた二人の共演。音楽にリラックスした余裕が加わり、表現も多彩となった。庭園で椅子に腰かけ、ほほえむ二人の写真に、演奏の変化が象徴されているよう。同時期の録音ではドヴォルザークの「4つのロマンティックな小品」やヤナーチェクのソナタを収録したCD（独 Discover 920317）も聴き物。



【板倉重雄氏プロフィール】1965年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994年HMV ジャパン株式会社に入社。1996年8月発売のCD「イダ・ヘンデルの芸術」（コロムビア）のライナーノーツで執筆活動を開始。2009年9月、初の単行本「カラヤンとLPレコード」（アルファベータ）を上梓。



日本音楽舞踊会議ピアノ部会公演

リスト生誕200年にちなんでピアノ部会の演奏会が7月15日、杉並公会堂小ホールで開催された。

内容について云うと、前半のステージではリストの独奏曲が中心となりながらも冒頭にはモーツァルトの連弾曲が配され、後半では独奏曲に続きピアノとチェロのデュオ、ピアノとモダン・ダンスのコラボレーションが用意され、ラストは華麗なピアノ独奏曲で締めると云った変化に富んだプログラムとなっていた。それでは、これからこの演奏会の印象をレポートして行こう。



出演者全員が集まって

前半ステージの一曲目は、当会代表でもあり優れたピアニストとして広く知られる深沢亮子（プリモ）と弟子格の若手、栗栖麻衣子（セコンド）によるモーツァルトの「連弾の為のソナタニ長調」。これはモーツァルト16歳の作品で、アレグロ、アンダンテ、アレグロモルトの三楽章からなる古典的なソナタ。この若さ溢れる明るく澁刺とした曲を深沢は澁み無く的確に弾き捌いて行く。そしてセコンドの栗栖はそれに反応して真面目に答えていたのは好い感じであった。ここからは連弾の楽しさ、音楽をする楽しさが会場の聴衆に充分伝わったと見て取れた。尚、一つ希望を云えば栗栖にセコンドとしての伴奏のタッチスピードがもう少しだけ備わっていれば、それが曲の充実感を更に高めたのではないかとも思えるのだが。

2曲目の演奏は若手、青年会員の上埜マユミ。彼女はリストの「二つの伝説」の二曲目「波の上を渡るパオラの聖フランシス」を弾いた。この曲は宗教的な厳粛さを伴ったピアノによる音詩でもありリストの作品中でも特異な光を放つ作品と云って良い。更に加えて超絶的ピアニズムが要求される難曲でもある。大海のうねる波の状景が左手のスケール等によって表され、その上部には聖フランシスを表す宗教的とも云えるどっしりしたテーマが和音を伴って現れ、曲は発展して行く。将にこの曲は絵画的想像力を刺激して止まない。彼女の演奏は丁寧よく弾き込んでいて目立ったミスもなく曲を纏めていた。しかし無難に仕上げようとした為かダイナミクスの幅があまり出なかったようだ。これはもう心持ちテンポを下げたダイナミクスレンジを広げれば各フレーズの陰影がもっと明確になったので

はないかと思えてならないし、冒頭のテーマの荘厳さ、左手に現れる波のうねりの強弱の幅、砕け散る波飛沫を表す両手交互の速い減7和音の上行等がもっと立体的になりイメージ豊かな音楽になっていた様な気がするのだが。

次の3曲目は同じくリストの“リゴレット・パラフレーズ”で独奏は田中俊子。この曲は高音域の華麗さ、豪快な低音域、更に加えて中音域に現れるロマンティックな旋律によって多くのピアニストが取り上げているポピュラーな曲である。田中はこの曲を充分弾き込んでおりダイナミクスバランスも良く破綻無く充実してしっかりと纏め上げていた。一つ希望を云えば対照的なダイナミクスの部分においての音色の効果的な棲み分けについてだが、私の好みから云えばII Pedの効果的使用が必要だったのではないかと云う事である。

もう一点、後半でクライマックスに向かう途中、リズムがカチッとしているのは勿論良いのだが奏者のカウントが表に現れ過ぎてるように私には思えた。寧ろこれは弾き手の内面にのみ留めておくべきではなかろうか。もしそれがあれば曲は更に充実し生き生きとして来ただろうにと考えている。

このステージ最後の4曲目は同じリストのメフィストワルツ一番でピアノ独奏は広瀬美紀子。この曲はゲーテの“ファウスト”に登場する悪魔、メフィストフェレスの音画的描写であるとも言え、だからこそこれは将に悪魔的表現と超絶的ピアノ技巧を必要とする息の長い難曲なのだ。この曲を、広瀬は冒頭からの徐々に広がって行く5度の累積からのテーマへの導入、中間部の微睡む旋律、そしてその後の結末に向かう連続する激しい動き、それから暫しの静寂の後に来る荒々しいコーダ部分迄を通して、音色やテンポ変化、ダイナミクスの対比等々実に良く考えて音楽的に作り上げていたのは共感に値する。しかしながら幾つかのミスが重なったのは表現が音楽的だっただけに頗る残念に思えてならない。次に機会があれば充分完成した形でのこの曲を是非、聴いて見たい。

休憩の後の5曲目はベテランの太田恵美子がラヴェルのソナチネを弾いた。ラヴェルはドビュッシーと同様に、響きこそ新しいが形式観はまるで彼とは異なって古典的で、その巧みな構成力からか多くの作曲学生のお手本ともされて来た。このソナチネはそんなラヴェルの思考法が凝縮された優雅にして粹な作品である。太田は真摯な姿勢でこの曲に取り組んで来ており、それは、第一楽章冒頭の第一テーマの弾き出しからもはっきりと伝わって来た。しかしながら、第一テーマと第二テーマの対比、第二楽章の特質的なラヴェル節の歌い回し、フィナーレの後半、展開部での緊張感の持続等もっと踏み込んで弾いて欲しかったと思うのは望み過ぎだろうか？

次の6曲目はベートーヴェンの「魔笛」の主題による七つの変奏曲。これはピアノとチェロのデュオでピアノを並木桂子、チェロは富永佐恵子が弾いた。ピアノの並木はアンサンブルの活動に積極的でチェロの富永とのデュオは前にも聴いていて息のあった二人の合わせがなかなかだったと言う記憶がある。今回も二人は良く呼応し合い淀み無く曲を仕上げている。特に注目したのが富永のチェロの力強さであり、又、それに答える瞬間的判断

力の良さが彼女の演奏をチェロに負けないものにしていたようである。時折顔を出すピアノの旋律の歌い方も彼女の存在感を高めていた一つの要素でもあるのだろう。

7曲目は、当会の理事長でもある戸引小夜子のピアノとモダンダンスの清水フミヒトとのコラボレーション。曲はビゼー＝ブゾーニのカルメンファンタジー。この曲はブゾーニがオペラ・カルメンから各場からのエッセンスを巧く繋げて纏め上げ1920年に出来たものと聞いている。一つ特徴的なのは顔見せ的な曲であるにも拘らずあの有名な“トレアドール”後半の旋律が登場しない事である。これは謎と云って良い。少し脇道に逸れたが元に戻して、この顔見



戸引小夜子のピアノと清水フミヒトのダンス

せ的な曲を独奏だけでなくダンスとのコラボレーションと云うパフォーマンスに拮げた戸引のアイデアは賞賛して良いのではないか？戸引のピアノはその役割を華麗に演じるのではなく、清水との距離を測りながら良くそれを支えており、又、ダンスの清水もピアノの動きに素早く反応しつつ個性的な演技を披露していた。こう云う系統の企画は今後も続けて欲しいものである。

締めくくりの曲はバラキレフの“イスラメイ”。独奏は当会の代表的ピアニストの一人でもある北川暁子。この曲はあるピアニストによれば、仕上げるのに一年以上もかかるとも云う難曲中の難曲の一つでもある。そしてこの曲を北川がどう弾くのかも注目すべき事であった。しかし、北川はこの難曲を飄々としてさり気なく普段着のように気張らずに弾いていた。これが彼女の個性であり従来からのスタイルなのであろう。その自然さで最後のクライマックス迄見事に弾き切ったのには感心させられた。ヴィルティオーゾ的な早弾きや大きなダイナミクスの変化や強調と対象に頼るだけで無く、こう云った弾き方がこう云う曲にも充分、通用すると云う事が立証されたのは新たな発見と云って良い。尚、エキゾチックで東洋的な旋律の中間部の表現で、彼女の前述のスタイルからか、性格からなのか不明だが、比較的あっさり通り過ぎて行く演奏だったのは少々心残りの気がしてならない。私の好みで云えばこの部分の歌には今一つの濃い味付けが必要とも思えるのだが。とは言え一つの立派な解釈がここに成立したのは事実である。

最後に、この公演が終わって伝わって来たのはこの演奏会が単なる自己顕示のみに終わらず音楽をすると云う熱意の共有と同時に発信であった事である。そしてこれは更なる発展へと繋がろう。（注 文中、敬称略）

2011年 7月25日 北條 直彦 記

（ほうじょう なおひこ 本会公演局長）

現代音楽見聞記 (6) 2011年6月

音楽評論 西 耕一

6月は日程が重なる会が多かった。

1日はクワトロ・ピアチェーリ 第10回定期。シヨスタコーヴィチ・プロジェクトとして彼の全SQより1曲、海外と日本の現代作品から1曲を取り上げる好企画。今回はグラスのSQ5番とシヨスタコは11番。新実徳英のSQ2番は委嘱初演。新実の燃焼力は現代日本作曲家でも随一のもの。行けなかったが触れておきたいのは同日の深澤功九響在団25周年記念Cbリサイタル。大島ミチルのCell division委嘱初演など。**3日**はeX.がイタリアから平山美智子を迎えてシェルシの山羊座の歌全曲版日本初演。これはチケット完売で行けず。**4日**は武生音楽祭の参加者による作曲グループPathと弦楽トリオ・マッシュルーム。昨年亡くなった津堅泰久のトリオが静謐な時間を構築、木下正道の朴訥ながらも精緻な音楽、徳永崇のミニマルでマッチョな音楽、今堀拓也、渡辺俊哉、それぞれに個性豊かで若い世代の成長を確認できた。**5日**は日大芸術学部博士後期課程・山口紘の研究発表として同学ホールでノーノのライブエレクトロニクス作品よりドナウのための後-前-奏曲（日本初演）とノスタルジック的ユートピア未来の風景を無料演奏。有馬純寿の見事な音響操作によりノーノの奥深さに打ちのめされた。**7日**も重なったが、レインボウ21として毎年サントリーホールが行う公募企画におけるフェリス女学院大学のピアノ七変化。内部奏法とプリペアド・ピアノには触れておきたい。プリペアドピアノ特集とはお見事！筆者は第13回グループNEXT作品展に。**8日**もレインボウ21。武蔵野音大企画の打楽器音楽、その創造と継承 ひとつの打音に世界を見、ひとつの曲に自らを聞く。吉原すみれ司会により武満徹、一柳慧、福士則夫、石井眞木、松村禎三らの打楽器音楽を特集。このような硬派な企画を行う大学生の奏者がいることは特筆したい。**9日**は勝間田裕子個展+3。勝間田の新作に湯浅譲二の蕪村五句、松平頼暁の閃光、近藤譲の柚径、三宅榛名の新作を加えた。聴き応えある選曲をアンサンブル・ノマドの演奏で。

16日は「日本歌曲と音の魔術師たち」第44回で畑中良輔特集。釜洞祐子や花房晴美らの名演で畑中の作曲家としての側面へ光を当てる。演奏・教育・批評・企画、音楽に関わる全領域で評価される畑中の卒寿を祝う。全作品リストなど見てみたい。**18日**は花岡千春がタンスマンを三部構成で特集。日本とも縁深いタンスマンの隠れた逸品を楽しむ。**19日**はなんとかG P見学でOTOの会、窪田翔の打楽器と共にから。fl,cl,vn,cb,percによる名倉明子、蛍手におけるアグレッシヴな音響イメージ、木槌使用の鷹羽弘晃曲、パフォーマンスと打楽器ソロの小鍛冶邦隆曲、精緻な書法の三瀬和朗曲など印象深い。その後「雅楽の未来 奇跡の声明」へ。東京楽所(雅楽/管絃・舞楽) 真言法響会 天台声明音律研究会(以上声明)にて三輪眞弘の声明付舞楽算命楽(委嘱・日本初演/振付:三輪眞弘)。延々と数列を数え悠久の時間を思わせる曲。同日の林光指揮pfの東混日本抒情歌曲集は無念。諦めた。**28日**はN響MUSIC TOMORROWで尾高賞の西村朗の蘇莫者、デュティユーの日本初演などあったが、TV鑑賞へ委ね、佐藤まどか&安田正昭のデュオリサイタルへ。武満の助手をしていた柿沼唯の三つの細密画初演。演奏家が望む音楽を書く作曲家の重要性を考えた。

(にし・こういち 賛助会員)

福島日記 (2)

作曲 小西 徹郎



講義のある日は毎朝5時に起床して6時38分の新幹線で郡山に向かう。郡山に着いたらカフェで授業内容や資料を確認し、少し早めに学校へ向かう。郡山の朝は多くの人々が日常生活を何もなかったように過ごしている。出勤、通学の風景が当たり前のようにあるのだ。駅前広場では朝のちょっとした休憩をしている人、子供たちがはしゃぐ声、そんな日常がある。学校の向かいにハローワーク郡山がある。学校に出勤する8時半頃は多くの人々が仕事を求めてハローワーク前には行列を成している。毎週その光景を横目に見ながら私は出勤するのだ。その瞬間思う、「私は恵まれている」ではなく「何とかしなくては」と。学生は毎日その現実を見ながら登校しているのだ。



学校に入って授業の準備をする。資料のコピーから始まって早めに登校している学生とのコミュニケーションもする。学校内に入るとそこはもう別世界で若いパワーと学ぶ場所というオーラに満ち溢れている。学生たちは明るくやりたいこと、学びたいことに悩みながらもまっすぐ進んでいる。一体福島の人たちは大震災、そして原発事故、このことに対してどのように思っているのか？正直言えば、福島、東北以外に在住している者は福島に対して同情にも似た、または憐憫の情を手向けている。ところが実際は当たり前のように日常生活を送っている。不安はないのだろうか？ どういう心情なのだろうか？

授業の合間、また放課後に学生と話したときに今まで表に出ていなかった彼らの思いや普段の生活のことが見えてきた。彼らは、特に1年生は入学前に被災して無事入学することも危うい状態であった。話していて感じることは、彼らはおそらく多くの意味を含めながら覚悟ができているのだと感じた。折角入学できたので、食らいついて学びたいという思いをひしひしと感じる。だから彼らは放射能への不安を感じながらも日々学んで成長していったのだと。様々な家庭環境もあるだろう、様々な経済的問題もあるだろう、だがその中で彼らは日々一生懸命に生きている、そんなパワーを私は感じるのだ。だからこそ私のモチベーションも更に上がっていくのだ。

わからないことはそのまま放置せずにその場で解決していく、このことはとても大切だ。学生に接していると、彼らはそのことをとてもよくわかっていると思う。わからなければそのままにせず放課後に質問をしてくる学生もいる。彼らは学んで、

多くを得ていきたいという気持ちがとても強いのだ。そのことは表に見えていなくても接すれば、話をすればすぐに見えてくるのだ。



先日、ほぼ音楽体験がない状態で入学してきた学生のオリジナルの歌を聴かせてもらった。私は正直言って、このままでは作品提出もできないまま1年を終えてしまうととても危惧していた。技術は勉強と訓練で身につけても音楽の感性は日々の積み重ねの中でしか養うことができない。所謂「センスを磨く」とは勉強では養うことができず、常に音楽だけでなく幅広く視野を広げてファッションやデザイン、またはビジネスについても「針が振れる」ことが重要である。

音楽に限らず「モノ作り」において一番大事なものは感性だ。そして感性と技術のバランスなのだ。そのことをわかっているだけに実は本当に私自身大丈夫だろうか？と心配をしていた。ところが特別講演の際に学生たちの作品を試聴する時間がありそこで私は初めてそのオリジナルソングを聴かせてもらった。とても、とてもいい曲だった。このことは彼らにとって大きな自信になっていくことだろう。そして私自身とてもうれしかった。初めて作った自分の音楽、それを皆でアレンジして作品という形にしていくこと、私は大丈夫だろうか？と心配していたがそれは私自身の彼らに対する認識の浅さ、甘さにすぎないことがわかった。人間は向上心と熱意と行動があれば常に成長していけるのだと。入試のときの緊張や意気込みの話、授業のやる気や学ぶ真剣さなどを通じて、そのことを私は学生から学ばせてもらった。どんなに大変な事態においても自分を見失わない、今回の震災を逆にバネにして飛躍的に成長している彼らを見ていると私は益々彼らと一緒に歩んでいきたいと思う。



国際アート&デザイン専門学校には「Wasabi Music Entertainment」という音楽を中心としたプロダクションがあり実務は学生によって運営されている。私はこのことは音楽業界のみならず、教育界において大いなる革命であると信じている。「Wasabi Music Entertainment」についても書いていきたいと思う。今日も福島は元気だ！

(こにし・てつろう 作曲会員)

《明日の歌を》— 楽友邂逅点 ガクユウカイコウテン —

橘川 琢

第四回 清道洋一 舞台から吹く風(1)

情勢厳しい「今」のただ中で日々模索する音楽人・芸術家。自ら信じる《明日の歌》を奏でながら発し続ける「現場」の声・その後ろ姿は、ともに旅する友のエールに似ている。

四回目は、作曲家として劇団での音楽や演奏会用作品を創るとともに、ダムコンクリートに関わるエンジニアとして第一線で活躍される清道洋一氏に、対談形式でお話を伺いたいと思います。

■清道 洋一（作曲家・コンクリートエンジニア）

1966年長野県生まれ。技術士（建設部門）、コンクリート診断士として、コンクリート構造物の調査、研究に係るコンサルタント業務の傍ら、表現活動を展開する。近年、木部与巴仁と音楽の境界を拓ける試みを実践し、所属する作曲家グループ『蒼』では、12星座にちなんだ異なる編成の12の室内楽の連作の発表をつづけており、本年11月25日旧東京音楽学校奏楽堂で、第8作目となる『サギリウスの唄』を初演予定。このほか、舞台、パレエ等のために40本近くを作曲し、いくつかは海外で公演され、高く評価された。

社団法人日本作曲家協議会会員

(Website) <http://musica1966kiyomichi.web.fc2.com/>

(Blog) <http://profile.ameba.jp/musica-1966/>



■橘川 琢（作曲家・日本音楽舞踊会議理事）

作曲を三木稔、助川敏弥の各氏ほかに師事。文部科学省音楽療法専門士。文化庁「本物の舞台芸術体験事業」に自作を含む《羽衣》(Aura-J)が採択される。『新感覚抒情派(「音楽現代」誌)』と評される抒情豊かな旋律と日本旋法から派生した色彩感ある和声・音響をもとにした現代クラシック音楽、現代邦楽作品を作曲。現在、諸芸術との共作を通じ、美の可能性と音楽の界面の多様性、さらに音楽の存在価値を追究している。



—今回のインタビューの直前まで、北関東の山奥の現場(ダム)にいらっしゃったそうで。清道さんはダムコンクリートに関わるエンジニアとして第一線でご活躍されていらっしゃいますが、現場にはどれくらい行かれるのですか？

「山の中に入るのは、シーズンによりますけれど、夏場メインで月に5日平均ですか。普段は研究所で、作業着を着て汗をかきながら石とコンクリートの実験とか、出来上がった構造物の調査ですね。・・・(幾つか現場の写真を見ながら)中の気温は11-12度、外に出たら42-43度の世界です。」

—普段、指揮台に立って指揮している姿からは想像がつかないお写真ですよ。現場、足を踏み外して落ちたら、ほぼ命を落とす場所ばかりで……。

「いやあ、現場では、いつも生きていることの喜びを感じますね。（笑）」

■座付作曲家に ——「萬國四季協會（ばんこくしききょうかい）」との出会い

—清道さんがメインに作曲されている劇団、「萬國四季協會(1985年5月～)」との関わりについてお聞きしたいのですが、参加のきっかけはどのような形で？また、音楽はどのようなものを書いていらっしゃったのでしょうか。

「萬國四季協會は1995年12月から参加しているので、約15年です。音楽を書くペースは、本公演が年2本、プラス1本、くらいです。15年書いていると、公演数等いろいろありましたが、約40本弱でしょうか。1本につき80分ぶんは書いていましたけど、勿論、現場で場面に合わせてのばしたり縮めたりします。書いていたのはメインテーマ、終曲、サブテーマ、そしてそのバリエーション。あと、効果音的なものですね。」

—なるほど、かなりの本数で……。15年前、そもそもの出会いはどんな感じで？

「参加した頃は20代で、まだ仲間がいなかったんです。母校の70周年記念のブラスの委嘱を受けて発表した直後くらいでした。当時、喫茶店『マチェック』という店があってそこに入り浸っていたんです。そこに萬國四季協會公演というポストカード（久野明美氏）があって、その公演の打ち上げでバンシキ（萬國四季協會）の人と飲んで、芝居の音楽を書かせてもらえませんか？と話して。その後ポストカードにある住所に手紙を書いたらすぐに返事が来て、まず芝居の稽古を見に来いとなりまして、その稽古のあと飲んで（笑）、清道の音楽でやるからと。」

—急展開ですね。それから15年以上の付き合いに。

「ええ。でも実はまだ（劇伴を）書いた事なくて。メソッドがないだけに、その後、一週間くらい徹夜して100曲作って、（場面に）当てていって悪い奴を全部切って。その前後の生活はどんな感じかというと、朝、後輩の後藤匡司君に録音とか細かいことを依頼して、昼はコンクリート捏ねに行って、夕方、中野で稽古。で、帰って夜作曲、朝、後藤君に依頼、そしてコンクリートを捏ねに……そんな一週間。合宿ですね（笑）ようやく終わりました。」

—なるほど。100曲を、昼に仕事をしながら作曲ですか。

「当時はまだ劇団に専門の音響屋さんがいて、中野の稽古の最中、これは良いこれは駄目、これはこうのばしたほうが良いと一から指導されて。とても勉強になりました。そのうち4作目で、その人は有名な劇団の音響さんになって行ってしまい、しまいには僕自身でオペレーターもやるようになって。」

—それから15年。仕事をしながら、また劇団内での役割も増えて大変だったのでは？

書くものが厳しいと思った事はないけれど、いまでも、一回一回初めて音を出すときに怖くてね。『明日、音楽入るよ！』なんて演出（渡辺大策）がいうんだけど、それまでヴァーグナー使って練習していたりするの。

（笑）いきなりヴァーグナーと勝負かよ、なんてね……。

（笑）」

—それはなかなかのプレッシャーで。（笑）

■役者さんや演奏家 — 舞台の華とともに

—清道さんと作曲関連でお話をされていて、いつも素敵だなと思うのが「演奏家を舞台上で一番かっこ良く見せたい」という言葉。それはやはり劇団の人たちと一緒にやってきて生まれた美意識なのではないでしょうか？

「そうですね……、僕の中には『（舞台上で）灯りが当たる人間が一番偉いんだ』という思いがありますね。勿論、ただ偉いとたてまつるだけでなく、役者さんや演出家と喧嘩も多くやりましたよ。この点、忘れられない人に、今村昌平さんの映画学校を出た大崎武士さんという役者がいました。この人は看板役者だったのですが、酒飲みということで僕と気が合っていると話しました。中でも彼の、『役者が綺麗に見えるように音楽を書く』という言葉覚えてます。」

—「役者」が綺麗に見えるように音楽を書く。……考えさせられる良い言葉ですね。それが、音楽がメインの世界では「演奏家」に。舞台音楽を続けてきて意識される事は？

「『悲しい場面で悲しい曲を、楽しい場面で楽しい曲を』というように感情に合わせて曲をつけることもあるけど、それ以外にも音楽の効果ってあります。最終的には演出家が判断する事もありますが、僕が自分で判断する事もある。役者の反応を見て変える事もあります。」

そしてよく自身が15年の間に『役者』として何度か舞台に立ったり台本を書いたりしてきたので、音楽と役者、役者と音楽、その他との関わりをいろいろな立場から実験的に沢山させて頂きました。そのなかで辿り着いたのは、『やっぱり裏方なんだから、ね』という気持ち。」



「風の森（チラシ裏面）」2005年1月
（作／イヨネソノ 演出／渡辺大策）



「授業（チラシ表面）」2006年9月
（作／響リュウ 演出／渡辺大策）

—ご自身で役者までされたのですか。そして光を浴びてみた感想として、逆に裏方の誇りのようなものも。

「ええ。舞台にしろ演奏会にしろステージに立つ人が一番偉い。じゃあ一番輝かせるためにはどうすればいいのか。そこがウラの腕の見せ所じゃないか。勿論これは（音楽家として考えた場合の）良い悪いの判断とはまた別の話なんだろうけど。でもね、役者も『自分のために書いてもらっている音楽だ』と思ってくれていましたし、『世の中の誰も聴いた事のない音楽と芝居やっているんだから、頑張らなきゃな。』という意識でやってくれていました。」

—そうでしたか。役者と裏方の、互いへの敬意。いいですね。

■目的地を求めて —多くの人生が交差する中で

—舞台人との交流の中で感じた事は？生活面や舞台裏、生き方含めて……。

「生活はまずみんな、よその舞台の裏方とかアルバイトしながら食いつないでいましたね。公演の無い時も、役者や裏方、みんな仲良く交流して（飲んで）いました。それとみんな居場所というものを探していました。入団退団の出入り含めいろいろありましたけど、自分が輝ける場所です。それは今もそうです。先ほどお話ししましたように僕自身が作曲以外にも役者をやったり、東大の駒場寮の野外で演劇をしたり、流れていろいろ激しくやっていました。

僕らの世代（45歳前後）は共通一次世代で、有無を言わずの受験競争の激しさがあって、友達が自殺したり、いじめの代わりに校内暴力が酷い世代で……。競争と自分なりの決着をつけて世の中出たら出たで、同じような状況。そしてバブル。安定もなく、道が分岐し続けた結果、歩く自分たちの居場所を持つ事はみんな大切なテーマでした。」

—私の世代（35歳前後）はロスト・ジェネレーション（さまよえる世代）などと呼ばれていますが、特に私自身、「受験戦争」と「就職氷河期」といった競争社会の焦燥感の中で病気になるなど、周囲の「居場所の奪い合い」の中、どうしようもない閉塞感を覚えた事もありました。勿論、競争そのものは、大なり小なりどの世代にも在るのでしょうか…。

「橘川さん、僕は時々思うんですけど、人間、時間は平等。そうしたら出来る事も案外平等なんじゃないかって。だからそんなに焦らなくても良いよってね。目的地だって違う。みんな目的地が一緒だったらちょっとは焦るかも知れないけれどね。だからこそ、世の中で光を浴びられる自分の居場所を自分で見つけたり作ることって、とても重要だと思うの。劇団や生活の仕事を通じて色んな人に会ったけれど、目的地はみんな違ってた。違う中で『人は人』と割り切る事で、みんな他人に優しくなってるね。役者にしても、裏方にしても。」

—「人は人」。差異を認めた者同士だからこそ、敬意を持って人に優しくなれる。そうありたいです。（続く）

（於：2011年7月17日 東京都台東区上野公園 国立科学博物館 上野本館）

《歌ってみたい！弾いてみたい！心に残る日本の作品》

日本音楽舞踊会議の出版楽譜のご案内

このコーナーは、本誌裏表紙に掲載されていましたが、本会から出版された楽譜を隔月で紹介するコーナーです。

今回は、モスクワへの思いをピアノ作品にした、元本会事務局長中島克磨氏の作品。ピアノのための詩曲「モスクワ」をご紹介します。

克磨氏が若い時の作品ですが、質の高い作品作りを目指した、意欲的な内容になっています。是非演奏される方のレパートリーに加えて下さい。

今回は、本年度作曲部会長になられた、西山淑子氏の童謡作品集をご案内しましょう。

西山淑子作品

「金子みすゞの詩による童謡集」（1988年）

人が生きていくうえで大切な、やさしさ・思いやりの心が、みすゞの童謡詩にはあふれています。

音楽もその琴線にふれてメロディがつい口に上がってきます。

そのような作品が、宝石箱のような曲集に一杯入っています。

大人とこどもがいっしょになって歌える作品集です。（全27曲）

A4版80頁 3,150円

童謡詩人金子みすゞについては、矢崎節夫氏を筆頭とする、研究・調査・紹介があり、今では知らない人がいないくらい、多くの人に親しまれている詩人です。しかし、みすゞさんの事が矢崎氏によって紹介され始めたのは、1984年頃で、一般的に広まりブームに迄なしたのは、90年代に入ってからですので、西山氏がみすゞさんの童謡詩を見出し、作曲をし出したのは、曲集年代をみても、かなり早い時期だったのではないのでしょうか。

この事について西山氏は「みすゞさんの詩との出会いは、娘が生まれたことがきっかけで、当時、ご自身で童謡コンサートを企画されていた矢崎節夫氏（みすゞ蘇りの第一人者）のコンサートのために作曲を始めました。が、初めて詩を読んだとき、なんて優しいんだろう！娘にぜひとも、こんなところを持ってほしいと思って、以来とりこになっています。」と語っています。

また、みすゞさんの詩について「子供の頃は誰にでも備わっている感性＝神秘さや不思議さに目をみはる感性＝“Sense of Wonder”が豊かで、見えないものをみる想像力が、宝石箱の中からあふれ出てくるようで、そのイマジネーションの飛躍を、詩人の西條八十は高く評価していました。」とも語っていました。

〈ちょっと一息 出版楽譜コーナー〉

ここで、みなさんお待ちかねの、「金子みすゞの詩による童謡集」を作曲しました西山淑子氏の横顔を紹介しましょう。

淑子さんは、笑うとえくぼができる、なかなかチャーミングな女性です。また、着こなしも上手で、カジュアルな服装にしても、スポーティな服装にしてもよく似合いますが、和服姿もなかなかオツなもんです。

しかし、一見落ち着いた物静かな女性に見えますが、自分関連の事をしゃべりだすと、特急列車のようになかなか止まらないというところが有り、人はこの難題を抱えつつ、淑子さんのご高説を伺うことになります。

それから、淑子さんはエレクトーンの名手でもあり、作・編曲・演奏・おしゃべりと、苦しいことも明るい笑顔で吹き飛ばす、才色兼備な女性です。

＜金子みすゞの詩による童謡集＞

童謡＝こどもの歌を作る側の怖さは、詩にしても、曲にしてもこどもから大人・お年寄りに至るまで、誰にでも作品の内容（質）から善し悪しまで解かってしまい、すぐに反応されるという事です。

また詩人や作曲家のこどもの歌の作品作り（姿勢・思想等）についても、その程度についても、作品を通じて解かってしまうという怖さが有ります。

演奏についても同じです。こどもの歌についての考えはもちろんのこと、演奏家の表現力（イマジネーション）の豊かさや多様さ・言葉の発音のきれいさ・正しさ、その表現力を支える演奏技術の確かさまでも、見えてきてしまいます。

西山氏は詩作や作曲について「歌は、豊かな心を育むのにとっても役に立ちます。幼い頃に聴いたり、口ずさんだりした歌は、大人になっても忘れないものです。だから、子供に聴かせる歌、子供と一緒にうたう歌には、優しい心が育つ、イマジネーションに富んだ内容が盛り込まれた詩が重要であり、そこに想像力をさらに掻き立てるような曲想とイントネーションの正しいメロディーが付けられている必要があると考えます。」と語っていました。

本作品の良いところは、弾いてみると解かりますが、発想が豊かで、それぞれの作品が生き生きしているところです。演奏家のみなさんは是非レパートリーに加えてみてはいかがでしょうか。

＜楽譜出版部からのお知らせ＞

今まで本会から出版された楽譜に加え、7月から新たに楽譜制作がはじまりました。楽譜制作をお待ち頂いている作曲家の皆様には、順次ご連絡をいたしまして、制作を進めて参りたいと思います。

これからもご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

本会出版局 楽譜出版部 ピューリタン高橋

わたしと小鳥とすずと (D-Dur)

金子みすゞ 詩
西山 淑子 作曲
mp

やさしく、おおらかに
♩ = 48

1 わ

た し が り よ う て を き ひ ろ げ て も お き
た し が か ら た を ゆ す っ て も -

そ れ は な ち っ と も と べ な い が ど
そ れ い な お と は で な い い け ど

と べ る こ と り は わ た し の よ う に -
あ の な る す - ず は わ た し の よ う に -

せみのおべべ

♩=62~66

詩：金子みすゞ
曲：西山 淑子

The first system of the musical score consists of three staves. The top staff is a treble clef with a key signature of three sharps (F#, C#, G#) and a 2/4 time signature. The middle and bottom staves are a grand staff (treble and bass clefs). The music begins with a piano (*mp*) dynamic. The right hand features a complex rhythmic pattern with sixteenth notes and rests, including a triplet of sixteenth notes. The left hand provides a simple accompaniment with eighth notes and rests.

The second system of the musical score starts at measure 5. It continues with the same three-staff format. The right hand has a more active melodic line with sixteenth notes, marked with a piano (*p*) dynamic and a crescendo (*cresc.*) hairpin. The left hand continues with a steady accompaniment of eighth notes.

The third system of the musical score starts at measure 8. It features a grand staff with a treble clef and a bass clef. The right hand has a melodic line with sixteenth notes, marked with a forte (*f*) dynamic. The left hand continues with a steady accompaniment of eighth notes.

西山淑子 作曲 金子みすゞ 詩 『せみのおべべ』より

CMDJ 2011 年 オペラコンサート

～愛の悲劇～

《ごあいさつ》

本会では、2005年12月2日に、Opera Concert 『愛・憎しみ・血の惨劇！』を公演して以来、タイトルに“愛”という言葉を含む、オペラコンサートを4回続けてまいりました。昨年は“愛”の言葉を外し、“音楽と笑い”というタイトルのもと、喜歌劇によるコンサートを開催しましたが、第6回目に当たる本年は、再び“愛”の言葉を含む『愛の悲劇』というタイトルのもと、前半はアリアコンサート、後半には、愛の悲劇を扱った大傑作であるビゼーの『カルメン』をハイライト形式で公演いたします。

『カルメン』は、ビゼー存命中の初演時においては、台詞（セリフ）を含むオペラ・コミック様式で演奏されました。今回の公演においては、初演時に倣って短い台詞を挿入しますが、歌唱部は原語（仏語）で歌い、台詞の部分は日本語で話すという様式を試みることにしました。原作の響と雰囲気損なわないように配慮しながら、なおかつ、一般の人々にも理解しやすい舞台をつくり上げたいという願いから生まれた選択です。

若い伸び盛りの歌手たちの新鮮な歌と演技と、ベテランの熟練された芸がよい相乗効果をもたらし、充実した舞台が展開されることを願っております。

ご来場のみなさまに、オペラの楽しさと魅力を伝えるため、キャスト、スタッフ一同、努力を重ねて参りました。ご覧いただいたみなさまに、感動と喜びを与えることが出来ましたら幸いに存じます。

日本音楽舞踊会議

コンサート実行委員： 浦 富美、中島 洋一（文責）

公演局長

北條 直彦

理事長

戸引 小夜子

《プログラム》

《前半》 ソプラノ歌手魅惑の競演(アリアコンサート)

ヴェルディ 『リゴレット』より “慕わしい人の名は”

Verdi [Rigoletto]~ “Caro nome che il mio cor”

歌：今井 梨紗子（ソプラノ）

プッチニ 『ラ・ボエーム』より

Puccini [La Bohème]~

“私の名はミミ” "Sì, mi chiamano Mimì"

“あなたの愛の声に呼ばれて出た家に” "Donde lieta uscì al tuo grido d'amore"

歌：高橋 順子（ソプラノ）

ヴェルディ 『椿姫』より “さようなら、過ぎ去った日よ”
Verdi [La Traviata]~ “Addio del passato”

マスネ 『エロディアード』より “美しく優しい君”
Massenet [Hérodiade]~ “Il est doux, il est bon”

歌：福田 礼美(ソプラノ)

マイアベーア(ディノラ) ”より “軽い影よ”
Meyerbeer [Dinorah] ~ “Ombre légère”

歌：齊藤 希絵(ソプラノ)

ヴェルディ 『海賊』より “私の頭から暗い考えを”
Verdi [Il Corsaro] ~ “Non so le tette immagini”

プッチーニ 『修道女アンジェリカ』より “母もなく”
Puccini [Suor Angelica] ~ “Senza mamma”

歌：吉水 知草(ソプラノ)

《後半》 ジョルジュ・ビゼー『カルメン』(ハイライト) Georges Bizet [Carmen]

《配 役》

カルメン：藤長 静佳(メゾ・ソプラノ) / ドン・ホセ：高柳 圭(テノール)
エスカミリオ：佐藤 光政(バリトン) / ミカエラ：小木曾 実奈(ソプラノ)
フラスキータ：坂本 久美(ソプラノ) / メルセデス：佐々木 寿子(ソプラノ)
合唱：(出演者全員<カルメン役とドンホセ役を除く>)

《演奏曲》

★第一幕

No. 5 “ハバネラ” (カルメン) / No. 7 二重唱 (ドン・ホセとミカエラ)

★第二幕

No. 12 “ジプシーの歌” (カルメン、フラスキータ、メルセデス)

No. 14 “闘牛士の歌” (エスカミリオ+メルセデス、フラスキータ、カルメン)

No. 17 “花の歌” (ドン・ホセ)

★第三幕

No. 20 三重唱+カルタの歌 (カルメン、フラスキータ、メルセデス)

No. 22 “ミカエラの Aria” (ミカエラ)

★第四幕

No. 27 二重唱と終わりの合唱 (カルメン、ドン・ホセ、合唱)

ピアノ伴奏：亀井奈緒美 (全演目)

司会：佐藤光政 / 演出：島信子 / 企画・構成：中島洋一

《曲目解説 中島 洋一》

《前半》 アリアコンサート

ヴェルディ 歌劇『リゴレット』より “慕わしい人の名は”

ユーゴの原作をもとに書かれたオペラ『リゴレット』が、オペラ作家としてのジュゼッペ・ヴェルディ（1813-1901）の名を不動のものにした傑作であることはいうまでもない。愛娘を自分が仕える公爵に奪われた道化リゴレットは恨みに燃え公爵への復讐を企むが、それは意に反し、最愛の娘を死に追いやるといふ凄惨な結果をもたらす。このオペラでヴェルディは無味乾燥なレシタティーボを廃し、管弦楽と歌によって途絶えることがない劇的音楽を作り上げ、オペラの革命をなした。

“慕わしい人の名は”は、学生に変装したマントヴァ公爵に愛をうち明けられたリゴレットの愛娘ジルダが、すっかり公爵の虜になり「私のいとしい人の名、忘れえぬ名」と歌うこの作品中唯一のソプラノのアリアである。アリアはホ長調 4/4 でゆったりしたテンポで歌い始められるが、次第に高まって行くジルダの感情を、高度な声楽的技巧を用いて表現するように書かれているため、美しい旋律が連なっているが、難曲となっている。

プッチニ 『ラ・ボエーム』より

夢を追うボヘミアンの若者たちを描いたオペラ『ラ・ボエーム』は、ジャコモ・プッチーニ（1858-1924）の代表作の一つであり、感傷的かつ叙情的な音楽により、多くの人々に愛される作品となっている。特に病弱でナイーブなヒロイン「ミミ」は、日本人好みのキャラクターで、この二つアリアは演奏会でもしばしば歌われる。

“私の名はミミ”

詩人ロドルフォに自分の冷たい手を温めてもらったお針子娘のミミが、ロドルフォの願いに答えて「みんなは私のことをミミと呼びますが、本当の名前はルチアです」と、自分のことを語り始める。清純な愛らしさが漂う曲で、数多くあるソプラノのオペラアリアのうちでも、佳品中の佳品といえよう。

“あなたの愛の声に呼ばれて出た家に”

ミミと詩人のロドルフォはやがて恋におちいる。しかし、病気を患ったミミは、自分の余命がそう長くないことを感じとる。第3幕で病弱な自分が連れ添っては、ロドルフォの足手まといになると考えたミミは別れを決心し、二人になると、突然「さようなら」を言う。ただバラ色の帽子は自分の思い出のために取っておいて欲しいという。“私の名はミミ”と同じく、ミミの動機で始まり、以前使った音の動機をいくつも再現させることで、ミミの心にある愛の思い出が聴衆にも伝わって来るように書かれている。ミミの心根が聴く者の心に染みこんで来るような、悲しくも美しいアリアである。

ヴェルディ 『椿姫』より “さようなら、過ぎ去った日よ”

第三幕でヒロインが歌うアリア。ヴィオレッタは恋人アルフレードの父、ジェルジョ・ジェルモンの願いを受け、心ならずもアルフレードと別れ、今は病に冒されパリの自宅でさみしく生活をしている。アルフレードの父ジェルモンの手紙で近くアルフレードが謝罪に訪れることを知る。しかし自分の死期を悟っているヴィオレッタは、「もう遅すぎるわ！」

「さようなら、過ぎ去った日よ。美しい夢よ」と、イ短調 6/8 で歌う。ヒロインの切ない感情が、ひしひしと伝わって来るアリアである。

マスネ 『エロディード』より “美しく優しい君”

サロメを題材にしたオペラ作品としては、リヒャルト・シュトラウスの『サロメ』が良く知られているが、題材のもとになっている新約聖書には、「サロメ」という名前は記されておらず、「ヘロディアの娘」と書かれている。なおヘロディアの夫ヘロデは、キリストが生まれる少し前の時代に、ユダヤ地区（パレスチナ）を統治した王である。

シュトラウスの『サロメ』の原作者はワイルドだが、ジュール・マスネ（1842-1912）の『エロディード』はフローベルの『三つの物語』を素材として、ポール・ミーリエが台本を書き下ろしたもので、タイトル・ロールもサロメの母エロディード（王妃ヘロディア）になっている。

シュトラウスの『サロメ』とはストーリーも異なり、また音楽的にはマスネらしい甘く美しい旋律に溢れ、前者とはまったく趣の違った劇音楽作品となっている。

“美しく優しい君”は第一幕において、母親を捜していたサロメが占い師ファニユエルに「お母さんはみつからなかったけど、砂漠で素晴らしい説教をする予言者に会ったわ」と、予言者で洗礼者のジャン（ヨカナン）について、想いをこめて歌うアリアで、変ホ長調 3/4 拍子で音階的に上行する音型で始まるが、彼女のジャンに対する熱い恋心を表すようにドラマチックに盛り上がって行く。そしてサロメは歌い終わると、今度は予言者ジャンを探しに出かけてゆく。

マイヤベーア(ディノラ)”より “軽い影よ”

ジャコモ・マイヤベーア(1791-1864)の『ディノラ』は、1859年パリのオペラ・コミックで初演されたオペラでブルターニュ地方の村娘ディノラと彼女の新郎、羊飼いはールの愛と結婚をめぐる物語である。

ところが、翌日の結婚式を前にして、新郎のベールは姿を消してしまう。ディノラは悲しみのあまり正気を失いさまよう。“軽い影よ”は、第二幕第一場、月の光が照らす森の中。正気を失ったディノラが自分の影に向かって「影よ行かないで、逃げないで、明日の結婚式の歌と踊りを教えてあげるわ、一緒に踊りましょう」と語りかけて歌う、変ニ長調 3/8 のワルツ風の軽快なアリアで、拍子が 6/8 に変わると、さらにテンポが速くなり、難度の高い器乐的音型が現れる。高度なコロラトゥーラの技術を必要とする歌で、曲想もなかなか変化に富んでおり、コロラトゥーラの技術をもつソプラノ歌手にとって、演奏のしがいがある佳品となっている。

ところで、新郎のハールが姿を消したのは、嵐で家が壊され、花嫁に苦勞をかけたくないということで、魔法使からきいた宝を探しに出かけたからであった。

ヴェルディ 『海賊』より “私の頭から暗い考えを”

ヴェルディは、多くのオペラ作品を残し、その殆どが、現在でも世界の歌劇場で頻繁に上演され続けているが、「海賊」は「マクベス」、「群島」に続く、彼の 12 番目のオペラ作品である。しかし、この作品は、作曲当時からヴェルディの作品としては低い評価を受けていたらしい。その評価が当たっているかどうかは、この作品を詳しく研究していない筆者には判断しかねるところだが、売れっ子になり、超多忙な生活の中、あまり気に入らない台本を手にして、出版社との契約を果たすために、ヤッツケ仕事をしてしまった、と

いうことは考えられないことではない。しかし、この作品とて、その響き、旋律は、紛れもなく、巨匠の手によるものであり、部分的になら、魅力的な音楽を探すことは困難ではない。

“私の頭から暗い考えを”は、第一幕、第二場でメドーラ（ソプラノ）が愛人のコルロードを待ちながら歌うアリアであり、ロマンツァという様式名が記されている。アリアは、ハ短調 6/8 拍子で書かれているが、ほぼ二節の有節形式がとられている。旋律も美しく、随所にコロラトゥーラ的な技巧が散りばめられ、巨匠の手慣れた技を感じさせる曲である。

プッチーニ 『修道女アンジェリカ』より “母もなく”

『修道女アンジェリカ』は、『外套』、『ジャンニ・スキッキ』を含む三部作第二番の作品で、登場人物が女性だけという「神秘劇」である。1917年に完成しているが、単独上演される機会は少ない。

7年前に罪の子を産んで未婚の母となったアンジェリカはそのため修道院で生活を送ることになる。妹の結婚にともなう遺産の分配のことで修道院を訪れた伯母から、離れて暮らす我が息子のことを聞くと、二年前に病死したと告げられる。アンジェリカは叫び声を上げ、悲しみのあまり泣き崩れる。

“母もなく”は、一人になった彼女が「母もなくお前は死んだのね」と我が子を追憶しながら歌うアリアで、平行和声に導かれた旋律は悲しく感動的である。最後は神に祈るように、長く伸ばされたA音で終わる。

《後半》 ビゼー カルメン（ハイライト）

ジョルジ・ビゼー（1838～1875）は、19才でローマ大賞を受賞するなど、早くから作曲家として頭角を表し、25歳のとき作曲した歌劇『真珠採り』でオペラ作曲家の地位を確立する。『カルメン』はメリメの小説をもとに、アンリ・メイヤックとリュドヴィク・アレヴィが台本を書いた。1875年パリのオペラ・コミック座で初演された当時は、台詞（セリフ）を含むオペラ・コミック様式で書かれたが、ビゼーの死後、友人の作曲家エルネスト・ギローがセリフの部分を書き直し、そちらの方が一般的になっている。今回は、台詞を含むオペラ・コミック様式に近いカタチで公演する。ビゼーは『カルメン』の初演から三ヶ月後、36才という若さで、敗血症を病みこの世を去っている。

★第一幕《セビリヤのタバコ工場前の広場》

電子オーケストラで、前奏曲B（死の主題）が奏され、女の悲鳴と雷鳴が響き、司会者が舞台に登場する。司会者の解説が終わると、死の主題に導かれ、今は煙草工場で働いているカルメンが登場し、「恋は、言うこときかない小鳥。誰も飼い慣らすことなんか出来ない」と歌い出す。有名な“ハバナラ”である。歌い終わると自分に興味を示さないホセにむしろ興味をいただき、ホセに向かって花を投げつける。ドン・ホセがそれを拾うと、ミカエラが現れる。ミカエラはドン・ホセの母からことづかかってきたと言って手紙とお金を渡し、口づけをする。そしてドン・ホセとミカエラは「二重唱」を歌う。ドン・

ホセは「きっとお母さんの言うとおりに、君をお嫁にもらおうよ。あんなジプシー女なんかに興味はないさ」と言い、ミカエラと別れる。
司会者が、その後の出来事を短く説明し、第一幕を終わる。

★第二幕《リーリヤス・バスティアの酒場》

“ジプシーの歌” ホ短調 3/4

カルメンがフラスキータ、メルセデスとともに歌い踊る。
歌い終わると、フラスキータとメルセデスが、勇敢で格好のいい闘牛士、エスカミリオの噂話をしていると、お目当てのエスカミリオが入ってくる。

“闘牛士の歌”へ短調→へ長調 4/4

始めはエスカミリオが一人で歌うが、長調に入って二度目の「トレアドル」の歌詞が現れるところから、カルメン、メルセデス、フラスキータが唱和する。歌い終わるとエスカミリオはカルメンに話しかける。二人で短いやりとりをした後、エスカミリオは退場。舞台が暗くなり、司会者が再び登場し、その後の展開を手短かに説明する。再び、舞台が明るくなると、そこにはドン・ホセがいる。ドン・ホセはそろそろ兵営に帰らなければならない、と言うと、カルメンは「帰りたければ帰ればいいわ。折角身銭を切ってサービスしてやったのに」とむくれる。ドン・ホセは「俺だって帰りたくないさ。お前を強く愛しているんだから」。カルメンが「お前の愛なんて信じないよ」吐き捨てるように言うと、ドン・ホセは胸からしおれた花を取り出し、「お前の投げたこの花を営倉の中でも決して手放なかった」と、カルメンに対する想いを歌う。“花の歌”

結局、ドン・ホセは兵営には帰れなくなり、カルメンたちの密輸団の仕事を手伝うこととなる。

★第三幕《山の中の荒れ地（密輸団の仕事場）》

カルメンは夢中でトランプ占いをしている。フラスキータ、メルセデスがそれをみている。**三重唱とカルタの歌** しかし、何度こころみても、出て来るのは死のカードばかり。

すると、ミカエラが姿を見せる。ドン・ホセを捜して、気質の若い女性など絶対に訪れるはずがないこんな場所にまで辿り着いたのだ。どんなことがあってもドン・ホセを連れて帰ろうという想いをこめて彼女は歌う。“ミカエラの Aria”

ドン・ホセとエスカミリオが現れる。ミカエラは隠れて様子を見る。二人はカルメンをめぐる争っている。そこにカルメンが来て止めに入る。そして、物陰に隠れていたミカエラも姿を現す。ドン・ホセはミカエラを見て驚くが、カルメンはドン・ホセに帰るように促す。しかし、ドン・ホセは拒む。ミカエラはドン・ホセの母が危篤であることを告げる。ドン・ホセとミカエラは連れだって、隠れ家を去って行く。

★第四幕《セビリヤの闘牛場の前》

カルメンを忘れることが出来ないドン・ホセは、昔の愛を取り戻そうとカルメンに迫る。「二重唱と終わりの合唱」そして、ご存知の展開となる。ここからは、観てからのお楽しみということで、説明は割愛する。

《演奏者プロフィール》



佐藤光政（さとう みつまさ：バリトン&司会）

1966年東京芸術大学音楽学部卒業。1973年第7回パリ国際音楽コンクール入賞。同年、第42回日本音楽コンクール声楽部門第1位入賞。1990年《春琴抄》でフィンランドのサヴォリンナ・オペラフェステヴァルに参加。第18回ジロー・オペラ賞受賞。1994年に2枚組CD『佐藤光政 日本の抒情を歌う』を発刊。2000年に、『日本の名歌を歌う』を発刊。2005年から始まったCMDJオペラ公演において、ずっと司会役および重要な役を担当し、公演の中心存在として出演し続けている。

磯谷威、大槻秀元、柴田陸、河本喜介の諸氏に師事。二期会、日本オペラ協会、日本音楽舞踊会議、各会員。



今井 梨紗子（いまい りさこ：ソプラノ）

2004年フェリス女学院大学音楽学部声楽学科卒業。

2005年同大学ディプロマコース修了。

2010年日本オペラ振興会オペラ歌手育成部第29期生修了。

第76回横浜新人演奏会、藤沢音楽家協会第2回推薦音楽会に出演。

牧山静江、古川博子の各氏に師事。

2011年4月 日本音楽舞踊会議主催『フレッシュコンサート CMDJ2011』に出演。日本音楽舞踊会議 研究員



高橋 順子（たかはし じゅんこ：ソプラノ）

千葉県市川市出身。高等学校3年の時に岡部多喜子教授に師事する。

武蔵野音楽大学声楽科卒業。

大学、同大学院に在学中、菊地初美教授、故ロドルフォ・リッチ氏に師事。同窓会主催による千葉県新人演奏会に出演。

現在岡部多喜子教授のもとでイタリア歌曲、イタリアオペラ、日本歌曲を中心に勉強、演奏活動している。

日本音楽舞踊会議 会員。



福田 礼美（ふくだ ひろみ：ソプラノ）

国立音楽大学音楽学部声楽科卒業。

第7回フランス音楽コンクール（奨励賞）、万里の長城杯（優秀賞）受賞。歌曲コンサートおよびオペラに多数出演。

2010月：日本音楽舞踊会議主催『フランス歌曲研究コンサート』に出演。

これまでに声楽を、木原節、平野忠彦、E・オブラスツォワの各氏に師事。現在は、秋山理恵氏に師事。二期会会員、日本音楽舞踊会議会員。



齋藤 希絵 (さいとう きえ：ソプラノ)

国立音楽大学音楽学部声楽学科卒業。洗足学園音楽大学大学院音楽研究科声楽専攻修了。これまでに声楽を、伴和香子、田島好一、秋山理恵の各氏に師事。第6回フランス音楽コンクール入選。第17回日本クラシック音楽コンクール入選。第2回横浜国際コンクール 第1位入賞。第10回長江杯国際音楽コンクールにて奨励賞。

2008年4月：日本音楽舞踊会議主催『フレッシュコンサート CMDJ2008』に出演。2010年9月、CMDJ2010年オペラコンサートの『メリー・ウィ

ドウ』にて主役のハンナ役として出演。日本音楽舞踊会議青年会員



吉水 知草 (よしみず ちぐさ：ソプラノ)

国立音楽大学声楽学科卒業。洗足学園音楽大学大学院音楽研究科声楽専攻修了。二期会オペラスタジオ第44期修了。声楽を秋山理恵氏に師事。全日本演奏家協会主催、第5回フランス音楽コンクールにて優秀賞受賞。第14回レスプレンドル音楽コンクールにて入賞。2009年4月：日本音楽舞踊会議主催『フレッシュコンサート CMDJ2009』に出演。

各種演奏会に出演するかたわら、日本仏教保育協会等主催の講習会講師も務める。淑徳幼児教育専門学校の講師を経て、現在(財)全国青少年教化協議会にて奉職。二期会準会員。

年教化協議会にて奉職。二期会準会員。



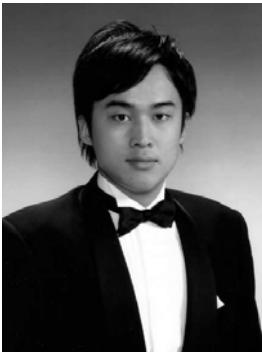
藤長 静佳 (ふじなが しずか：メゾ・ソプラノ)

国立音楽大学声楽学科、同大学院声楽専攻オペラコース修了。東京藝術大学別科声楽専攻修了。二期会オペラ研修所マスタークラス修了。サントリーホールデビューコンサート「レインボウ21」、「二期会新進声楽家の夕べ」に出演。オペラ「フィガロの結婚」(ケルビーノ)、「コシ・ファン・トゥッテ」(ドラベツラ)、「秘密の結婚」(フィダルマ)、「こうもり」(オルロフスキー公爵)、「リゴレット」(マッダレーナ)、「ヘンゼルとグレーテル」(お母さん)等に出演。また、ベートーベン「第九」、ヘンデル「メサイア」、モーツァルト「ハ短調ミサ」「戴冠式ミサ」「ミサ・ソレムニス」「ヴェスペレ」「ドミニクス・ミサ」、バッハ「ロ短調ミサ」、カンタータ等のアルトソリストを務める。

また、ベートーベン「第九」、ヘンデル「メサイア」、モーツァルト「ハ短調ミサ」「戴冠式ミサ」「ミサ・ソレムニス」「ヴェスペレ」「ドミニクス・ミサ」、バッハ「ロ短調ミサ」、カンタータ等のアルトソリストを務める。

佐藤峰子、久岡昇、寺谷千枝子、加賀山和香の各氏に師事。二期会会員。





高柳 圭 (たかやなぎ けい：テノール)

国立音楽大学声楽学科卒業。同大学大学院声楽専攻オペラコース修了。第54期二期会オペラ研修所マスタークラス修了、修了時に優秀賞受賞。これまでに、持木弘、田口興輔、藤川泰彰、小林一男、経種廉彦の各氏に師事。

第77回読売新人演奏会出演。大学院オペラ「ドン・ジョヴァンニ」ドン・オッターヴィオ役でオペラデビュー。以降、「コシ・ファン・トゥッテ」フェランド役、「椿姫」アルフレード役、「リゴレット」マントヴァ公爵役、「道化師」ペッペ役、「ジャンニ・スキッキ」ゲラルド役などでオペラに出演。ベートーヴェン「第九」、シューベルトやラインベルガーのミサ曲のソリストを務める。二期会会員



小木曾 実奈 (こぎそ みな：ソプラノ)

国立音楽大学音楽学部声楽学科、同大学院音楽研究科声楽専攻（フランス歌曲コース）修了。在学中、同大学主催の第71回ソロ室内楽定期演奏会、卒業演奏会に出演。

2009年4月、日本音楽舞踊会議主催フレッシュコンサートCMDJ2009に出演。同年9月 CMDJ2009年オペラコンサートに出演
これまでに声楽を、菅家美保子、中山早智恵、牧山静江、秋山理恵の各氏に師事。日本音楽舞踊会議青年会員



坂本 久美 (さかもと くみ：ソプラノ)

国立音楽大学演奏学科声楽専修卒業。

同大学大学院音楽研究科声楽専攻歌曲コース修了。

本年4月、日本音楽舞踊会議主催フレッシュコンサートCMDJ2009に出演。秋山理恵氏に師事。

現在 日本音楽舞踊会議研究員



佐々木 寿子 (ささき ひさこ：ソプラノ)

山形県出身。

山形県立山形北高等学校音楽科、国立音楽大学音楽学部声楽学科卒業。同大学大学院音楽研究科声楽専攻修了。

これまで声楽を、中川順子、吉澤祐江、秋山理恵の各氏に師事。

第13回山形県新人演奏会に出演。

2008年9月、日本音楽舞踊会議主催CMDJオペラコンサート「ヘンゼルとグレーテル」に、グレーテル役で出演。本年4月、日本音楽舞踊会議主催フレッシュコンサートCMDJ2009に出演。日本音楽舞踊会議青年会員



亀井 奈緒美 (かめい・なおみ：ピアノ)

東京音楽大学ピアノ演奏家コース卒業。

在学中より蓼科高原音楽祭に参加、室内楽を学ぶ。

第3回吹田音楽コンクール・ピアノソロ部門入賞。

家永ピアノオーディション合格者披露演奏会、国際芸術連盟主催ガラコンサート、日本音楽舞踊会議主催「アンサンブルの夕べ」「オペラコンサート・シリーズ」などに出演。

深澤亮子、弘中孝、佐藤由紀子、竹尾聆子、雄倉恵子、小田美津子の

各氏に師事。

現在、ソロ演奏、室内楽、オペラ、合唱伴奏など幅広く活動している。

日本音楽舞踊会議 会員。



ニュース

被災地の「こども音楽再生基金」募金活動始まる。

“音楽と楽器の力で、こどもたちに笑顔を”というキャッチフレーズで、東日本大震災の被災地でのこどもの音楽活動を支援するため、全国楽器協会とミュージシャンの坂本龍一氏がお金を出し合って、「こどもの音楽再生基金」の基礎を作った。

基礎基金は1,000万円だが、3年後には3億円位にしたい意向である。

そのための募金活動を行う。

この基金により、被災地に1,000校以上ある幼稚園～小中学校に対し、楽器備品の用意や、楽器修理支援、こどもの音楽活動支援を行っていく予定である。

文責・高橋雅光

トピックス

—日本音楽集団も若返りか—

現代作品を中心に、和楽器のアンサンブル活動を続けている、日本音楽集団の代表であり、指揮者の田村拓男氏が第203回定期演奏会の舞台上で語ったところによると、現在集団の運営委員7名全員が委員を辞退した。理由は「世代交代」である。代表の田村拓男氏も代表を辞退したが、団員の意向により、代表を続けることになった。

高橋雅光

マリア・カラス、レナータ・テバルディなどとともに、イタリアオペラの黄金時代を築いた大歌手、ジュリエッタ・シミオナートが亡くなったのは今年の5月7日のことである。生まれたのが、1910年5月12日のことだから、100才を5日後にひかえ没したことになる。もし、今頃追悼文を書くとしたら、とんでもなくタイミングが外れているが、実を言うと私は、シミオナートの歌を肉声で聴く機会を逃しており、到底追悼文などを書く資格はない。しかし、本会で本年9月のオペラコンサートにおいて『カルメン』を取り上げることになったと知って、昔のことを思い出したのである。

1959年冬なので、私が高校二年の時である。NHKの招聘でイタリア歌劇団が来日し、その公演がNHKテレビで放送された。田舎の山の中の高校生だった私は、オペラの全曲公演などテレビでもなければ、なかなか観ることは出来なかったのである。『カルメン』、『愛の妙薬』、『オテロ』が放送されたことが、記憶にある。

特に私は『カルメン』の全曲放送を鑑賞して、興奮した。田舎の私の実家には『カルメン』組曲のSPレコードがあり、子供の頃からよく聴いていた。ワクワクさせる「前奏曲」、「ジプシーの踊り」、トランペットとピッコロが楽しい「子供達の合唱」（組曲では管弦楽のみ）など、どれを聴いても飽きることがなかった。それで、オペラ全曲を鑑賞したらどんなだろうと興味津々だったのだ。結果は興奮の連続で、すでにいくつかのオペラを、ラジオ放送などを通して全曲聴いた経験があった私だが、こんなに最初から最後まで、退屈させないオペラ作品があるのかと思ったのである。歌い手も素晴らしかった。特に、カルメン役のシミオナート、ドン・ホセ役のマリオ・デル・モナコの迫力は凄かった。ミカエラはまだ若かったガブリエラ・トゥッチが演じたと思う。初々しく透明感のある声が印象に残っている。

高校の音楽の時間に先生が、「みなさんはイタリアオペラの放送は聴きましたか？」と質問したが誰も手を挙げなかった。彼女はクラスの中では最も読譜力があり音楽通の私だけは手を挙げてくれることを期待していたのであろうが、誰も手を挙げなかったので、「こんなチャンスは滅多にないのもったいない、なんて不勉強なんでしょう」とヒステリックに怒った。私は、先生からクラブ活動で音楽部に入ることを薦められていながら、断ったりしたことで、先生との関係が少し悪くなっていた。それで、少々いじわるな気持ちもあって手を挙げなかったのである。一年数ヶ月後、私は東京の音楽大学に入学したが、その後もシミオナートは何度か来日している。しかし、大学の頃はワーグナーの方に興味が移り、また学生的身で、外来オペラを観るお金などなかなか工面できなかったこともあり、シミオナートの生の舞台を見損ねてしまった。それから間もなくして彼女は引退した。そんなこともあったので、追悼の意味もこめ、編集長にお願いして、今月号の表紙に彼女の写真を載せてもらうことにした。

(火星人)

会と会員の情報

CMDJ 会と会員のスケジュール

8 月

- 7日(日) 深沢亮子 【野田市啓心会にてコンサート 14:00】
7日(日) 廣瀬史佳 共演：池上英樹 (マリンバ)
1. 富士山河口湖音楽祭 2011 マリンバプレコンサート
【河口湖オルゴールの森美術館 11:00】
2. 吹奏楽連盟ゲスト出演【山梨県コラニー文化ホール大ホール 17:00】
8日(月) 定例理事会【事務所 19:00】
19日(金) 廣瀬史佳 共演：池上英樹 (打楽器) 曲：バルトーク ルーマニア民俗
舞曲 他 【河口湖富士桜荘 19:00】
20日(土) 廣瀬史佳 風と星の音楽会「池上英樹パーカッションコンサート」
曲：A. ピアソラ アヴェマリア他【八ヶ岳自然文化園大研修室 19:30
2,000円 学生1,500円】
23日(火) 深沢亮子 朝日カルチャーセンター 共演：上村文乃 (Vc)
【新宿住友ビル7F 13:30~15:00】
28日(日) 助川敏弥-栃木県ピアノコンクール課題曲作曲者特別講座【栃木総合文
化センターリハーサル室 A級-D級 13:30~15:30・E級-G級 16:00
~19:00】
30日(日) 高橋通出品- (社) 日本歌曲振興会主催 邦楽器とともに VI
【高橋通作曲 トルファンの蜃気楼 他 津田ホール 18:30】

9 月

- 2日(金) 北川暁子・靖子 サロンコンサート ブラームスの夕べ
曲目/ベートーヴェン：Vn. ソナタ第8番、ブラームス：7つの幻想曲
op. 117 ブラームス：Vn. ソナタ 第2番 【表参道カワイコンサートサ
ロンパウゼ 19:00開演】
3日(土) 廣瀬史佳 東日本大震災復興支援チャリティコンサート 「池上英樹
超絶技巧のマリンバと打楽器」サラサーテ：ツィゴイネルワイゼン他
【山梨県笛吹市スコレーセンター17:30 1,500円高校生以下1,000円】
4日(日) 滝澤三枝子ピアノリサイタル ピアノで魅せるショパンからラテンへ
【板橋区立成増アクトホール 15:00 2,500円】
7日(水) 定例理事会【事務所 19:00】
15日(木) 2011CMDJ オペラコンサート 『愛の悲劇』 (詳細は裏表紙参照)
前半：プラノ歌手魅惑の競演 (アリアコンサート)
後半：「カルメン」ハイライト
【すみだトリフォニー小ホール 18:30 3,000円】

- 17日(土) 浜尾夕美ピアノリサイタル シューマン：ピアノ・ソナタ第3番へ長調 作品14【浜離宮朝日ホール18:00 3,500円】
- 22日(木)機関誌『音楽の世界』編集会議 会事務所19:00～
- 25日(日)深沢亮子 千葉音楽コンクール本選審査
- 28日(水)橘川琢出品ー邦楽創造集団 オーラJ定期演奏会「静寂と闇」沙羅双樹～祇園精舎による翻案：橘川琢編曲 ほか【日本橋劇場 19:00 2,800円】
- 30日(金)クラシックと能楽 メンデルスゾーン：Vn. と Pf. の為のソナタ・鶴(能)他、能：友枝雄人、Vn. 北川靖子、Pf. 北川暁子。
【セルリアンタワー能楽堂(澁谷) 18:30 開演 指定席 8,000円、問い合わせ 03-3477-9999 他】

10月

- 4日(火) 20世紀以降の音楽とその潮流～様々な音の風景Ⅷ～演奏曲決定
高橋通：「Phase1」(フルートと箏)、田中範康：「Dialogue1Ⅱ,Ⅲ」(ピアノ)、浅香満：“MONOGRAM”(フルート)、桑原洋明：詩曲「うつせみの世は常なしと知るものを」(チェロとピアノ)、ロクリアン・正岡：「キャシリアンの心」(混声四部合唱+チェロ)、北條直彦：「翔、響、彩」(ピアノ)、中嶋恒雄：堀内幸枝の詩による四つの歌曲、助川敏弥：「ゆめじ」、「Toccata,Au Soleil」(ピアノ)
【すみだトリフォニー小 18:30 開演 前売 3,000円/当日 3,500円】
- 7日(金) 定例理事会【事務所19:00】
- 10日(月・祝) 第2回文化シンポジウム 西洋史の中の音楽家たち
【としま産業会館 8階多目的ホール 13:00 一般：1,000円、学生：500円 会員：500円】
- 25日(火)深沢亮子 【イイノホール・オープニングコンサート 19:00】

11月

- 7日(月) 定例理事会【事務所19:00】
- 10日(木) 深沢亮子 Duo リサイタル 中村静香さんと(Vn)【東京文化会館 19:00】
- 11日(金) 並木桂子作曲家シリーズⅤ ドヴォルジャーク
曲：ピアノトリオ「ドゥムキー」ほか【ティアラこうとう小ホール 19:00】
- 12日(土) CMDJ 若い翼によるコンサート4
【すみだトリフォニー小ホール 19:00 開演 3,000円】現在6組出場予定。詳細は後日報告します。
- 19日・20日(土・日) 栃木県ピアノコンクール本選会
全課程課題曲に助川敏弥作品【宇都宮短期大学須賀正記念ホール】
- 21日(月)深沢亮子 “翔の会” 公開レッスン
【コトブキ・D. I. センター 10:00】

12月

- 6日(火) ピアノと室内楽の夕べ
モーツァルト：ケーゲルシュタットトリオ、ピアノトリオ第4番、助川敏弥：松雪草(初演) 他

深沢亮子(Pf.)、恵藤久美子(Vn.)、安田謙一郎(Vc.)、藤井洋子(Cl.)

【音楽の友ホール 19:00 開演 一般 4,500 円】

7 日(水) 定例理事会【事務所 19:00】

10 日(土) 深沢亮子 麦の会チャリティーコンサート共演：岡山潔 (Vn) 他
【津田ホール 14:30】

18 日(日) 深沢亮子 東日本大震災のためのチャリティー・コンサート
【瑞浪市総合文化ホール 14:00】

2012年

1 月

22 日(日) 「2012 年新春に歌う」(仮称)【すみだトリフォニー小ホール】
(詳細未定・昼間公演)

29 日(日) フランス歌曲・研究コンサート
【中目黒GTプラザホール 時間未定 一般 2,000 円 学生:1,000 円】

2 月

11 日(土・祭) 日本音楽舞踊会議 第50期定期総会

23 日(土) 深沢亮子ピアノリサイタル
共演：ブリュッセル弦楽四重奏団【浜離宮朝日ホール 19:00】

3 月

12 日(月) 日本音楽舞踊会議主催「出版コンサート(仮称) 詳細未定
【すみだトリフォニー小ホール】

24 日(土) 日本音楽舞踊会議主催「コンチェルトの夕べ」(仮称)
【ヤマハ・エレクトーンシティ渋谷 16:00 開演】出演者募集中(戸引)

4 月

13 日(金) CMDJフレッシュコンサート2012
【すみだトリフォニー小ホール 18:30 開演 2,500 円】参加者募集中

5 月

10 日(木) 作曲部会コンサート
【すみだトリフォニー小ホール 詳細未定】

7 月

7 日(土) 声楽部会コンサート
【すみだトリフォニー小ホール 詳細未定】

13 日(金) ピアノ部会コンサート
【東京オペラシティリサイタルホール 19:00 開演 詳細未定】

9 月

8 日(土) 深沢亮子ピアノリサイタル 共演：ウィーン弦楽トリオ
【浜離宮朝日ホール 14:00】

編集後記

女子サッカー「なでしこジャパン」の活躍は久しぶりの明るいニュースで、決勝戦は眠さを堪え、最後まで観てしまいました。ところで、元国立音楽大学学長の吉田泰輔氏が書かれた今月号の論壇も、また大震災に触れておりますが、タイトルを「悲願」ではなく、「喜願」とされたところからも、変革に向けての強いメッセージが読み取れると思います。今月号は合併号ですので、雑誌の発行は一月休んで、次号は10月号となります。それまでの間、9月15日には、今年で第6回目を迎えるオペラコンサートが開催されます。このコンサートはこの数年、毎年満員に近いお客を集め、盛況となっておりますが、今年も興味深い演目が並び、好演奏が期待できると思います。ご都合がございましたら、どうぞご来場ください。編集スタッフ一同、一月の休みを効果的に活用し、英気を養い、10月号に備えたいと思います。読者のみなさまも、どうかよい夏休みをお過ごし下さい。（編集長：中島洋一）

本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福島	福島大学生協	024-548-0091
千葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	(株)紀伊国屋書店 和雑誌アクセスセンター	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック(株)	03-3813-6751
	全国学生生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静岡	吉見書店	054-252-0157
愛知	正文館書店外商部	052-931-9321
	マコト書店	052-501-0063
大阪	(株)ヤマミュージック大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵庫	(株)ジュンク堂書店 外商部	078-262-7794
京都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

編集長：中島洋一 副編集長：橘川 琢

編集スタッフ：新井知子 浦 富美 大久保靖子 栗栖麻衣子 高島和義 高橋 通 高橋雅光
戸引小夜子 北條直彦 湯浅玲子

音楽の世界 8月号(通巻 531号)

2011年8月1日発行 定価 500円(本体 476円)

発行人：英二 三枝子

編集・発行所 日本音楽舞踊会議 The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-1-6 寿美ビル 305 Tel/Fax:(03)3369 7496

HP: <http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> E-mail: onbukai@mua.biglobe.ne.jp

A/D: 音楽の世界編集部 Tel: (03)3369 7496 印刷: イゲタ印刷(株) Tel: (04)7185 0471

購読料 年間: 5000円 (6ヶ月: 2500円) 振替 00110-4-65140 (日本音楽舞踊会議)

* 乱丁、落丁がございましたらお取替えます